

---

# 青いメガネのその少女

柚唄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青いメガネのその少女

### 【Nコード】

N2598R

### 【作者名】

柚唄

### 【あらすじ】

元：クラスメイトを召喚しました

今はいない王族に使えるべき騎士のカイル・アンダーリス  
使い魔召喚儀式でクラスメイトのフラットを召喚！？

騎士としての誇り以外は普通な性格のカイルと、クラスを中心に  
いるような明るい性格だけど色々ダメなフラットのゆるゆる学園恋愛  
ファンタジー

ヒロイン常識人により恋愛イベントが発生しにくいお話です。

王道から外れたお話です。きゃっきゃっいやんなことなんて起  
りませんよー。

改訂版というかヒロイン視点書いてます。更新停止中もどきごめ  
んなさい。

## 01・召喚したのは

いよいよだ。カイルは期待と不安で胸を膨らまし、自分の心臓が緊張によって鼓動が高鳴っていくのを感じた。

そろそろ自分の番。使い魔召喚儀式を、成功させなくては。

何が出てくるかを想像してワクワク期待する。その一方で、弱い使い魔を召喚してクラスメイトや先生から落胆されてしますし、騎士の家系の者として失格だ。

「次は……、カイル、お前の番だな」

丘の真ん中で、みんなの召喚した使い魔をチェックしたり、召喚し終わった生徒に属性を示す色付きバンダナを配っていた先生に呼ばれる。前の人は火属性の使い魔を召喚したらしく、先生に赤いバンダナを配られていた。それを確認していると、みんなの視線が段々自分に注がれていることに気付いた。……やっべえ、緊張してきたかも。

ふう、と一度深呼吸をして先生の元へと歩いていく。一步一步芝生の生えた丘を踏みしめる。

みんなが、静かに自分を見続けている。輪になって丘の真ん中を囲っているから、四方八方から視線が集まった。

「今、俺が立っている場所が丘の真ん中、つまり一番魔力の密度が高い場所だ。ここで召喚するんだ。カイル、わかったか？」

「はい、わかりました」

先生の言う魔力の密度が高い場所に近づくと、先生が後ろに数歩下がり俺と距離を取った。

もう一度、深呼吸をする。フー……。

心臓の音はもう最高潮に達している。爆発しそうだ。

——ツァーグラウンドよ。我の名は、カイル・アンダー

イス！――

契約呪文を唱え、自分の名前を叫んだその途端、地面には幾何学的な円の模様が現れる。大きさは直径約2mというところ。

その円の真ん中に小さな球が現れる。球は虹色に輝いていて大きさは拳ぐらい。その球はゆっくりと上昇し、カイルの口元の高さまで上がると止まった。

ここまでは何事もなく、順調だ。そして、カイルは球に唇をあてる。いわゆるキスをした。これで契約は出来た。

その瞬間、球は白く輝きだして形を変え始める。

形を変形させていく球は縦長に伸びていき人型をとる。

人型……、まさかエルフか？ エルフは使い魔の中でも高位な生き物だ。それを召喚すれば自分の実力もとても高いものだろう。もしかして俺はそのエルフの召喚に成功したのか？

160cmあるかないかの人型になった光は徐々にそのまばゆい光を和らげていった。

そして現れたのは――同じ規定服を着た、少女。

「え……？」

それを見たクラスメイトの誰かが声をあげる。これは……どういう事だろうか？

俺は動揺する自分の心を抑えつけ、その少女に近付いた。

その体は一定のリズムで胸を上下させている。目は前髪に隠れていてよく見えない。だが、透き通った青いメガネには見覚えがある。喋ったことはないが、確か同じクラスの生徒のはず。前髪をいつも目を覆い隠すようにしていて、目立つ青メガネが特徴的だからよく覚えている。それに、成績は良くない方でよく先生に補習を受けさせられていた。あと……まあ色々。それがこの少女だという確証はあるわけじゃないが。

しかし……何故、

召喚されたのだ？

いや、召喚されたのは別に特に疑問ではない。ただ、その……。過去に人を召喚した例も何度かある。しかし……クラスメイトを召喚したのは初耳だ。今まで人を召喚した魔法使いは実力の高い低いにかかわらず平々凡々な人を召喚したという。農民とか、商人とか平々凡々な人。まだ学生だが、それでも魔法使いの彼女が平々凡々に属されるのだろうか。

いやいやいやいやいや。そんな喋ったこともないしこの少女がクラスメイトだと決まったわけでも

「さ、さっきまで隣にいたのに……！」

誰かが狼狽した声音で言った。多分少女と仲の良いクラスメイトの声だろう。

ああ……、ってことは、俺は。

クラスメイトを召喚してしまったのだ。

## 01・召喚したのは（後書き）

クラスメイト召喚させちゃいました。

カイル。君どうすんの。名前知らないんかい。しっかりしろー。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 02・少女の名前は

何が起こったんだろう……？ あたしは、目の前で起こったことが信じられなかった。

だって……。友達が、家族同然の友達が、使い魔召喚儀式でクラスメイトに召喚されたんだよ……？

「さ、さっきまで隣にいたのに……！」

「……んー？ ……ん？」

目の前でスウスウ寝ていた同じ規定服を着ている少女――  
改めましてクラスメイトは、先ほどの少女の声に反応したのか、目を開けた。だが。

開けたはいいものの、目の前に俺の顔があって何かなんだかよくわかっていないらしい。

おそらく「んー？」は目を覚ました時に呻いた声であり、「ん？」というのが俺の顔を見て混乱している声だろう。

俺が何か言った方がいいのだろうか。えっと、名前、なんだったけ？ あれ、俺、この子の名前知らないんだが。

「フラット、起きたか？」

「……あ、はい」

そう考えていたら先生がその子に声をかけた。いつのまにか俺の近くまで来てたらしい。

ああ、このクラスメイトはフラットというのか。知らなかった。フラット。その名前を頭の中で反芻する。召喚したクラスメイトの名前は、フラット。

「フラット。お前、今自分に何が起こったか、わかるか？」

「……す、すいません。よくわからないんですけど……」

先生があやすように話しかける。フラットは困惑した顔で答えた。なんせみんなが自分を見ているのだから、困惑するのも当たり前か。表情にでているから、多分しっかり目が覚めたのだろう。

……あと、今気付いたことだが、フラットの声は特徴的だ。そこらへんにいる女子より少し低いのは何でもないのだが、なんというか、カラスの鳴き声みたいな声をしている。弦がピンと張られているときにそれを弾いたような声だ。

「お前、今、カイルに使い魔召喚儀式で召喚されたんだ」

「……へー。……へー、へー、へー。……はあっ!？」

先生が今起きたこと、いや、起きてしまったことを言つとフラットは目を白黒させて大声を張り上げた。にしては声がデカすぎないか。少し耳が痛い。

「えっえっえっどーゆーことですか!？ 召喚されたってえっ!？」

「落ち着けて。あとでまた詳しく話す」

フラットの困惑っぷりに少し苦笑しながら宥めた先生は、この丘にいる生徒をぐるりと一周しながら見ると、神妙な面持ちで言った。「いいか。このことについては緘口令を敷く。第一級緘口令、をだ」

クラスメイト達の方からハッと息を飲む音が複数聞こえた。

第一級、緘口令。その事柄について話してはいけないどころか、

緘口令が敷かれていることさえ言ってはいけない、というもの。

俺がフラットを召喚したことは、それほどのことなのか。

「ああ、勘違いするなよ？ これはあくまで学園長にこのことを相談して今後の方針を決定までの話だ。騒ぎ立てるなつてことだ」

なーんだ、びっくりしたあ、などという声が聞こえる。俺もほつとしたよ。

「で、それまではカイルとフラットのことを話すわけにもいかないけど、二人の使い魔がいないのもおかしいだろ？そもそもフラットは召喚してないんだけどな」

そつえば、フラットは自分の次、つまりクラスで最後に使い魔召喚儀式をするはずだった。

「だから、カイルについては『体調不良で欠席していた』、フラットについては『浮かれすぎて寮の階段を踏み外して落ちて療養室で休んでいた』とでも言っとけ」

「先生、オレの扱い酷くないですか」

「フラットが体調不良で休むとか信じられないし、この理由はお前に最適だろ？」

「あー……まあ、確かに」

先生とフラットのやり取りに、クラスメイトから笑いがこぼれる。そういえば、フラットの一人称は『オレ』だったな。この一人称はフラットの特徴の一つだ。

「あ、先生」

フラットが、何かを思い出したかのように声をあげる。

「大体何が起こったかはわかったんですけど、オレ、使い魔召喚しなくてもいいんですか？」

「ああ、何が起こるかわからないからな。とりあえず儀式はナシだ」「了解です」

確かに、魔法使いに召喚された魔法使いが何か召喚したら何が出てくるかわからない。

「じゃあオレは学園長に話をしてからみんなは寮に戻ってくれ。じゃあ、今日はこれで解散だ」

早口に言い去ると、先生は大腿で丘を降りて行った。

クラスメイトの集まりの中から、1人の少女がこちらに駆け寄ってきた。多分、フラットの友達だろう。さて、俺も寮に戻るか、と思いつラットに背を向けると声をかけられた。

「あ、アンダーリス」

「ん？ なんだ？」

「あー……えっと、とりあえず、よろしくー！ んじゃー！」

それだけ言うと、フラットは駆け寄ってきた少女と何かを話し始める。

しっかし……。名字を呼び捨てか。珍しい奴もいるもんだなと心

の片隅で思いつつ、どうよろしくすればいいのかよくわからないな  
と悪態を吐いて、カイルは一人寮に向かって歩き出した。

## 02 少女の名前は（後書き）

フラットっていうんだ。フラットは庶民です。カイルは貴族です。だから初対面で呼び捨ては珍しいのです。カイル君も仲良くしようと努力しないか！

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

### 03・灰色のバンダナは

俺は寮へと向かう途中、あることに気がついた。

本来使い魔は召喚されたら主人と一緒<sup>マスター</sup>に暮らすことになっている。だから主人と使い魔は同じ部屋で暮らすのだ。……でも、まあ、事情が事情だし、個人的にも女子と同じ部屋は困るというかこっ恥ずかしいというか。

部屋なんて別々でいいか。ああ、そういえば

「明日は真名の交換儀式、か」

ポツリと、口に出して言ってみた。真名、か……。

真名というのは、神霊地で親が子供に与える正式な名前のことだ。俺は、使い魔契約儀式の際にカイル・アンダーリスと名乗ったが、この名前は真名ではない。一つ、シークレットネームが隠されていたりする。

明日、使い魔に真名を言うのだ。そして、そこで使い魔から名前を教えてもらう。人型ではない限り使い魔は言葉を発することができないから、テレパシーを使うことになる。使い魔と、1対1で行われるテレパシー。どちらかが死なない限り、このテレパシーは一生使えるらしい。俺みたいにシークレットネームを持っている人もいるから、テレパシーは丁度いいのだろう。

さて、考え事もほどほどに、早く寮に帰るか。俺、体調不良ってことになってるしな。

俺はゆっくり動かしていた足を速めた。

「あー……えっと、とりあえず、よろしくー！ んじゃ！」

ブルーはアンダーリス君にそう言うところを向いた。

「ブルー、だ、大丈夫だった？」

「んー、びっくりしたけど全然平気だよー」

心配した。すっごい心配した。喋ってたらブルーがいきなり隣から消えて、アンダーリス君に召喚されて。

でも、ブルーのケロッとした、いつも通りの顔を見て。すっごいホッとした。

「じゃ、オレ、『階段から落ちて怪我した』らしいから、寮に帰ろーか」

「あ、うん。療養室じゃなくてもいいの？」

「そこらへんは先生がどうかしてくれるんじゃない？ 大体寮に戻れつつたのは先生だし？」

そっか、と相槌を打ち、寮に歩き始める。足を動かすあたしたち二人の足元には一匹の、犬。……じゃなくて、あたしの使い魔。あたしにしっかり付いてきてる。

ブルーのことに気を取られてすっかり忘れちゃってた！

あたしの使い魔の首にはしっかりと、あたしとおそろいの灰色のバンダナが巻きつけられている。あたしのバンダナはさっきから手にある。存在、忘れてた……。

「キャム、バンダナ付けないの？ 使い魔に付けて自分は付けないってどういうこと？」

「いや、それは、その、ブルーのことに気を取られて忘れてて……。あたしの次の次にアンダーリス君だったし……」

「あ、そっか。いや、次の次の次って使い魔のバンダナつけんのに時間かけすぎー」

ブルーと会話しながらバンダナをどこに付けるか考えた。うーん、どこに付けよっかな……。

やっぱここは無難に手首かな？ 半袖の規定服着てるし、手首でも隠れないし、うん、そうしょ！

「手首に付けるの？」

「あ、うん」

ブルーがあたしの顔を窺いながら手首へと視線を戻す。何を考え

たのか「あ、そうだ。」と言ってあたしのバンダナを搔つ攫った。  
「付けたげる」

「え、自分でやるからいいよ!」

「でも片手じゃ付けにくいでしょ?」

うひひつ、と怪しく笑ってあたしの手首にバンダナを付ける様子は宛ら変態っぽかった。少しだけ。

バンダナを二重に巻き、固結び。それを見たあたしの使い魔は、尻尾を元氣よく振り始めた。

「おー犬ところ。ご主人様と同じバンダナを付けてすごくうれし  
いです、とても?」

「ワンっ」

「そーかそーか。でも、灰色のバンダナってやっぱパツとしないよ  
ね……レアなのにさ。クラスでもキャムしかいなかったよね」

「でも言っでどうにかなることもないから……」

「だねー。あ、オレどうなるんだろ。オレも無属性ってことで灰色  
になるんじゃない? そしたらお揃いじゃん!」

「あ、そうだねー。でもそしたらアンダーリス君ともお揃いにな  
るよ?」

「……………うわあ。野郎とお揃いなんざうれしくねーぜ……」

どんまい、と声をかけて考える。自分で言っでから気付いたけど、  
ブルーはどの属性でも結局アンダーリス君と同じ色のバンダナに  
なるよね……。なんか、それってブルーを盗られた感じがしてさみ  
しい。なら、どうせなら、

「灰色だと、いいな」

「ん、そうだね。それならキャムとも一緒だしね!」

ニコツつと笑って、ブルーはうれしい答えを言ってくれた。その  
ことに口が緩む。ブルーも、同じこと考えてるんだって。

「こっから3人で部屋まで競争しよ! 正確には2人と一匹!」

話しているうちに寮の玄関まで辿り着いたらしい。かけっこか。  
よし、

「よーいどん！」

「あ、ちょ、待てキヤムうつうつうつ！」

ブルーの前を走りながら足元で走っている自分の使い魔を見る。笑いかけてよろしく、と心の中で呟くと「よろしく」と頭の中にかわいい声が響いて来た。あ、これがテレパシー、かな？　なんか体験したことあるような気がするけど。

部屋に着いたらブルーに使い魔とテレパシーしたこと言おうと！

### 03・灰色のパンダは（後書き）

キムちゃん。めっちゃ可愛い子ですよ。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。  
キャラの口調などはまだ不安定です。すみません。

## 04・ワンちゃんの声は

「さつきね、使い魔とテレパシーしたんだ！」

かけっこで華々しくブルーに勝利したあたしは、さっそく使い魔とテレパシーしたことを喋ってみた。

「お、さっそくか！ 何話したん？」

「よろしく、って。ね、ワンちゃん？」

「ワンっ」

あたしとお揃いの灰色のバンダナをしたワンちゃんは、まっすぐ目を見て返事をしてくれた。これ、信頼関係が気付けてるってことでいいのかな？

「犬っころと仲がよろしいこと……。オレ、シャワー浴びてくるよ。あとは二人だけで仲良くどーぞー」

二人だけで仲良く、って……。茶化されてる、の？

言ったとおりブルーは自分のクローゼットから部屋着を取り出してお風呂場に行ってしまった。そしてここにいるのは、あたしとワンちゃん。

話しかけるべきか、話しかけないべきか。少し逡巡したあとに話しかけることにした。

声に出した方がいいのか、出さない方がいいのか。どっちにしようかな、とこのことについても少し考える。

そういえば、さつきテレパシーしたときに『体験したことあるかも』って思ったっけ。あ、でもそれはワンちゃんが返事してくれた時か。……うーん？

「あの、あの、マスター？」

悩んで悩んで悩みまくっていたらワンちゃんから話しかけてくれた。さつきテレパシーしてくれたときのような頭に木霊するような感じはしない。

……え？ し……、

「喋った？」

口から出た間抜けな声。だって、すごいビックリしたんだもん……。

でも、なんでワンちゃんが喋ってるの……？ 今口を開いてワンって鳴いてなかった？ 人型を取れるもの以外は喋れないんじゃないの？ それとも、あたしのこの耳に何か原因があるの……？

「わあ！ やっぱりマスターはわたしが何言ってるかわかるんだ！」

「どういう、こと？」

「ん？ マスター、<sup>ミックス</sup>獣混じゃないの？」

マスターに召喚されてから、ずっと思ってたんだ。どうしてマスターは獣の匂いがするんだろう、ってね。ほんの少しの、獣臭。わたしは犬だから、感じ取ったんだよ。匂いはどこからするんだろう、って思ってた集中してみたんだ。そしたら、頭から匂いがした。

マスターのヘッドドレスに漬されているあたりに。匂いの元が、二つ。

だから、ピンと来たんだよ。もしかして、獣耳かって。

もしかして、<sup>ミックス</sup>獣混じゃないのかなってね。

獣混なら、わたしの鳴き声がすっかりと言葉としてわかるはず。そう思って、返事をするときに「ワンっ（うん）」って鳴いたけど、相手をされなかった。でも、よく考えて人がいるところで返事できるわけないよね。獣混は、あまりバレたくないものだもん。ブルーっていう人が傍にいたのもあるし。

マスターがテレパシーでよろしく、って言ってきたときはびっくりしちゃった。条件反射でわたしもテレパシーでよろしく、って返

しちゃったけどね。

マスター達の部屋について、ブルーっていう人はシャワー浴びに行ったから、マスターに話しかけるチャンスは今しかないって、思ったの。どうせわたしの鳴き声は傍からみたらワンワン鳴いてるようにしか聞こえないし。

「あの、あの、マスター？」

そう話しかけると、マスターは笑った後に怪訝な顔をした。

「喋った？」

マスターの表情については少し気になったけど、マスターと会話できた方がうれしかった。

「わあ！やっぱりマスターはわたしが何言ってるかわかるんだ！」

「どういう、こと？」

「？ マスター、獣混<sup>ミックス</sup>じゃないの？」

「みつくす、って何？」

マスター、獣混って言葉、知らないんですかって言おうとして、その言葉を飲み込んだ。

もしかして、

「マスター、わたしの声を聞いたのは今がはじめてなの？」

「う、うん……。テレパシーでなら聞いたけど……」

マスターは、今のわたしの「あの、あの、マスター？」ではじめて声を聞いた、らしい。つまり、今まで聞こえてなかったんだ。わたしがテレパシーをするまで。しかも獣耳はヘッドドレスをして隠している。そして獣混という言葉を知らない。

もしかして、マスターって。

マスターって。

×××××なんですか？

「え、っと……。みつくすって、何かな？」

マスターに話しかけられて、あわてて思考の海から顔を出す。

「あ、獣混ってというのは獣の体が混じってる人間のことを言うんだよ！」

「もしかして、あたしの耳のこと……？」

わたしに獣耳のことがバレてるとは思わなかったのか、マスターは困惑した表情をしている。

「そっだよ！ だからマスターにはわたしの声が聞こえるの。傍から見たらわたしはワンワン鳴いてるようにしか見えないんだよ」

「そっ、なんだ……。つまり、あたしはみつくすだから君の声が聞こえるの？」

マスターは無理やり自分を納得させたみたいだった。ホントに理解しているのかな？

「そっだよ」

「そっか」

マスターは獣混について一応は納得したみたい。マスターは1人でうんうん頷いたあと、わたしの方を向いて尋ねた。

「じゃあ、他の人の使い魔の鳴き声も何を言ってるかわかるのかな？」

「うーん。無理だと思うよ。マスターも、わたしの声が分かるようになったのはテレパシーしてからだしね」

「そっか。……うん、説明、ありがとう」

マスターがにつこりとほほ笑む。その表情はとても柔らかいもので。

たとえば、マスターが×××××であろうと。これからもずーっと付いて行きたくなるような顔だった。ま、わたしはマスターの使い魔なんだから、一生ついて行くのは当たり前だけどね！

「さて、と。ちょっと疲れちゃったなあ。シャワー浴びて来ようっと。君もおいで」

マスターが胸の前で両手を大きく広げる。飛び乗ってこいってことかな？ じゃあ遠慮なくっ

「わっ元気良いね」。あたし達とブルーで洗いつこしよっか」

そっいうと、マスターはさっきブルーっていう人が使っていたクローゼットとはまた違うクローゼットから服を取り出して、わたし

を抱き上げたままお風呂場へと向かった。

洗いっことは、すごく楽しかった。マスターに言ったら怒られるだろうけど、マスターは着やせするタイプみたいだね。そう、すごくおおきかったんだ。何がとは言えないけど。

ブルーっていう人は……。うん、彼女のためにも言わないでおくとするよ。

#### 04・ウンちゃんの声は（後書き）

フラットは貧乳みたいです。決して作者の趣味ではありません。  
×××××ってなんだろう。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 05・襲撃される猫は

僕は猫である。名前はあるけどマスターにはまだ教えてない。だから名乗らないでよくよ。

マスターにまだ名前を教えてない理由？ いや、召喚されたばかりなのにテレパシーがすぐ使えるようになるわけないでしょ？ 使えたらそれはかなり優秀、またはわけありただだよ。僕はテレパシーが使えるけど、マスターは僕の声を聞くことさえできない。

だから明日、マスターの先生の元でコツを教わってから真名の交換儀式をするのだ。

つまり。

明日まで僕はマスターと意思疎通ができないんだ。

でも、僕たち使い魔は人間の言葉が分かるから、はい、かいいえで答えられることなら大丈夫だけど。首を、首がない使い魔は体を、上下か横に振るだけでいい。だから多くの使い魔と主人はそれで初日を乗り切るのだ。それは僕とマスターにも適用される。

この日数回この方法でやりとりをしたときのこと。

「私は食事をとってきます。あそこは使い魔が入れないのでここで待っていてくださいね」

食堂に着くと、そこにはイスとテーブルがただひたすら並んでいた。僕の背丈は全然ないから、イスとテーブルの脚しか見えないけど、右を見ても左を見ても前を見ても向こうがぎりぎり見えるか見えないかというところ。前は厨房みたいだ。

入口と厨房の中間ぐらいまで歩き、そのイスの足元で待たされることとなった。

マスターが自分ので厨房に行つたところを見ると、どうやら食事は自分で席まで取ってくるらしい。

キビキビと歩いて行くマスターを見送ったあと、僕は首だけ起こして腹這いになった。疲れていたわけじゃなかったけど、なんとなく

く休息を取ろうと思ったんだ。

しかし。

それは襲撃者——いや、マスターのクラスメイトによって邪魔されることになる。

「ね、猫だ！ 猫だー！」

いきなり抱きついてきたその人には見覚えがあった。目を覆い尽くすような前髪、そして淡い青い眼鏡。マスターのクラスメイトで召喚された人間。確か……フラットという名前だったような。

「あ、オレ君のマスターの友達！ 警戒しないでね！」

警戒してるつもりはない。だからとりあえず首を縦に振っておいた。

それに満足したかのように笑うと、フラットさんは僕の体をずつと撫でていた。僕の体をなでるその手つきはとても気持ちいい。

フラットさんに身を任せ、幸せに浸っていた僕に、唐突に疑問が浮かび上がる。

どうしてフラットさんは僕が友達の使い魔だとわかったのだろうか。灰と黒の虎模様の猫。別に多いというわけではないが、同じような猫が他にいても珍しくはない。なのに僕だと、友達の使い魔だとわかった。

どうしてだろう。考えても分からない。

フラットさんの腕に抱かれたまま考え続けていると、突然フラットさんが声を上げた。

「あ、キャム」

「どこいったか探したんだよ？ あれ？ ……赤いバンダナの猫？ あ、もしかしてさっき召喚されてた？」

フラットさんの友達が僕たちに近づいてきた。

その会話を聞いたあと、僕の思考はフル活動した。フラットさんの友達の言葉によって疑問が解消されたからだ。

そうだ、僕は首に赤いバンダナを巻いている。猫なのに？ 無属性じゃないの？ と思うだろう。そう、僕は火属性だ。猫なのに火

属性。

それには訳がある。まあ今はそれは置いておこう。そうか、だからフラットさんは僕がマスターの使い魔だとわかったのか。猫で火属性と言うのはとても少ないからね。

「ワンちゃんはあるうちで待たせてるから一緒に待っててくれない？」  
「ん、りょーかい。猫ちゃん、バイバイ！」

フラットさんは僕を腕から下ろすと、走り去って行った。下町の服を着てペンギン走りをするフラットさんに少し笑った。人にぶつかりそうになったのか、足をつんのめらせていた。

なんとなく、厨房に向かって行ったフラットさんの友達の、えっと、キヤムさん？に視線を走らせる。ゆっくりと足取りで厨房に向かって歩いている。

すると、丁度マスターがこっちに向かって歩いてきた。手には夕食を乗せていると思われるトレイを持っている。マスターとキヤムさんはお互いの存在を確認したのか、立ち止まって一言二言言葉を交わすと、また歩き出した。マスターは厨房に行ったときと変わらないキビキビとした足取りだ。

「待たせちゃってごめんなさい。さて、食事にしましょうか」

マスターはトレイから僕の食事だと思われるお皿を一枚床に置いた。うん、おいしそうだ。

その後はマスターに話しかけられながら食事を取り、食後は寮に戻った。

少し疲れてしまい、欠伸をするとマスターに「眠いですか？」と眠気を孕んだ声で質問された。眠気を少し帯びた頭でゆっくり頷くそうですか、私も疲れてるので一緒に寝ましょう、とマスターに抱き抱えられ、そのマスターの髪から香る良い花の匂いに包まれながら僕の意識は闇に沈んで行った。



## 05・襲撃される猫は（後書き）

火属性の猫とかやばいな僕。

マスターの名前は考え中です。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 06・爽やかな友人と愛らしい小人は

目の前には虹色の靄が広がっていた。この空間にはそれしかない。声が反響していて、何を言っているのかよくわからない。耳を凝らして聞き取るうとする。

「き————れ。————れ。————れ！」

声は段々大きくなる。頭の中に鳴り響いてガンガンする。

「——れ！——れ！——れ！——れ！」

うるさいうるさいうるさい！

目の前にはいつも通りの自分の部屋の風景が広がっていた。少し気分が悪い。いやな夢を見ていたのは覚えているが内容がいまいち思い出せない。何の夢を見たのだろうか。けれどそれを考えても仕方がないなと思いつつ、ベットから身を起して身支度を済まして食堂へと行く準備をする。

規定服を着終わり部屋のドアの取っ手に手を掛ける。後ろから見られているような気がして振り向くと、青い靄が見えた————気がした。

目を凝らしてみるがそこには何もない。いつも通りの部屋だ。

勘違いだったのだろうか。いや、確かに視線を感じたぞ……？

胸にもやややした感情を溜めながら、ドアを手前に引いて廊下に出る。

だから、カイルは知る由もなかった。

青い靄が再び自分の部屋に現われて、カイルの背に向けて言葉発したことを。

俺が廊下に出ると、向かって反対側の壁にロジスがいた。腕を組

んで壁によりかかり、顔をあげてこちらの姿を確認すると清々しい笑顔を向けてきた。

「よっ！」

「おう」

軽く挨拶を交わしあい、二人で並んで食堂に向かって歩き出した。ロジスの足元には昨日召喚した小人がいる。その小人の背丈はロジスの膝ぐらいしかなく、オレ達の歩く速さに付いていくのが難しいのか小さい足を一生懸命動かして走らせている。

その小人を見ている俺に気付いたのか、ロジスは自分を見上げている小人に向かってふっと笑うと、小人の脇に手を入れて抱き上げた。

「随分扱いに慣れてるんだな」

「ん？ ああ、孤児院では小さい奴らの面倒もよく見てたからな！  
これくらい簡単だぜ？」

孤児院、という言葉が出てきたので瞬時にまずい話になったなと気まずくなる。

「いや気にすんなって」

とロジスに爽やかに言われ、顔に出ていたのだと気付く。悪いな、と一声かけて再び小人を観察することにした。

首にはロジスの腕に巻かれているバンダナと同じ橙のバンダナをしている。頭は三角帽子を被っていて、バンダナとは少し違う柑子色をしている。服は質素な感じのする貫頭衣を着ている。靴はしつとりした布で出来ているようだ。

小人はロジスに抱かれているため顔をロジスの胸に押しつけていたが、俺があまりにもジロジロ視線を寄こしているためか、くりくりとした髪の毛と同じ海老茶色の瞳を少し細めて不機嫌そうにこちらを向いた。

「……な、に」

それは、そう。小鳥が啼いたような声というべきか。とてもかわいらしい声であって。

「い、いや、なんでもない」

唐突に話しかけられた、ということも加わり狼狽する。ロジスから見れば俺はひどくあたふたしているのだから驚いたのだ。仕方がない。

「君が気になってたから見てたんだって。こいつはボクの友達の力イル」

「カイルだ。よろしくな」

主人であるロジスが俺を友達だと紹介したからだろうか。不機嫌だった顔は瞬く間に花が咲いたような笑顔となり、少し赤みのかかった頬を緩ませた。

「よ、ろ、し、く」

一文字一文字、薄いピンク色の口から発せられる言葉。それは一つ一つが魔法の言葉のよう。

何気なく前を見ると、女子生徒の姿がこちらへ歩いて来るのがちらほら確認できた。どうやら女子寮生と男子寮生が合流する廊下まで来ていたらしい。

右に曲がり、前を歩く生徒にクラスメイトがいるか探してみる。

灰と黒の虎模様の猫に赤いバンダナが巻かれていた。心当たりがあるので視線を上へと辿らせると、栗色の髪を持つ女子生徒が視認出来る。後姿からするに彼女はクラスメイトだろう。

クラスメイトの姿を捉えたからといっても話しかけるわけではない。なんとなく、だ。そのクラスメイトはどうやら前にいる人に話しかけているようだ。他の人より少し長い上着。無造作に耳の高さで束ねられた髪の手。

振り向いた女子生徒は予想した通り、淡い青い透明なメガネをかけていて、前髪が目を覆い尽くすような長さまで垂らされていた。

フラット。それが彼女の名前であり、同時に俺の使い魔の名前でもある。

女子生徒にはブルーと呼ばれていた。

使い魔の主人として話しかけるべきかまごついていると、隣にい

たロジスもフラットに気付いたらしく、ひそひそ声で話しかけてきた。

「フラットは一応お前の使い魔だろ？ 話しかけなくていいのか？」  
その言葉に背を押されたように——実際ロジスに背中を押されて二、三步よろめく。視線を足元から前に移しフラットに話しかけようとした。

結論を言うと、出来なかった。

フラットがいるはずの場所はすでに食堂の中であり、彼女達はすでに右、ないしは左に曲がったのか視界から消えていたのだ。

背中を押して勇気づけてくれたはずのロジスは右でそっぽを向いてクックと笑っており、更にはそのロジスに抱かれている柑子色の小人も笑っていた。

朝食はそのままロジスと取っていたが、俺の顔を見るとすぐに思い出したように笑い出す。いたたまれない気分になり、ロジスの顔を見ないようにうつむいて食事をとることになってしまった。

## 06・爽やかな友人と愛らしい小人は（後書き）

ロジス無駄に明るく爽やか。女子に人気があると思われるけど。カイルはフラットを特別意識してるけど恋愛感情ゼロってところですな。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 07・相棒の名前は

集まった皆に向かって口を開いた先生。その内容は緘口令を解除する、ということ。

「緘口令は解除するからな。カイルとフラットは真名の交換儀式が終わったら俺に付いてきてくれ」

教壇に立っている先生はそれだけ言って、使い魔とのテレパシーのコツを説明し始めた。どこに連れて行かれるのだらう。学園長室か？

テレパシーのコツを聞きながら、教室の左列の一番後ろの二人掛け椅子に友達と座っているフラットの方を見る。と言っても、俺はロジスと右列の一番後ろの二人掛け椅子に座っているから、中央列の人を挟んで左を見るだけなんだがな。

ダルそうに右肘を木製の机について、左手は左に座っている友達の使い魔の犬を撫でている。友達と喋っているのだおそらく先生の話を聞いていない。

案の定先生に怒られたあとは両手を伸ばして机にぐでつと倒れ込んでいた。顔をあげて視線を先生の方に向けているので、おそらく話は聞いているのだと思われる。

説明が終わると、各々でやってみなさいと言われたので、説明された通りにやってみた。

「（聞こえるか……？ カイル・アンダーリスだ）」

「（おつ、どもー！ フラットです！）」

意外とあっさり出来てしまった。フラットの方を見ると、こちらに顔を向けて手はチョコキを作り笑っていた。ちなみに前髪で目が見えないから口とえくぼで笑っていると判断した。

ロジスも小人とのテレパシーに成功したらしい。

教室を見渡すとみんなテレパシーが出来ているらしく、先生はそれを確認すると一人ずつ前に出てきて真名の交換儀式をするよう言

い渡した。順番は使い魔召喚儀式と同じだ。

自分の番が来るまでフラットにテレパシーで話しかけるべきだろうか。寮も別々だし、他の人より交流してないように感じる。普通に話しかけるのもいいが、今まで自分から女子に話しかけたことはないので少しためらわれる。

何人かのクラスメイトが先生に呼ばれたあと、テレパシーで話しかけることにしようと決めた。

「（悪いが、お前の名前はフラット・ブルーでいいのか？ 真名じゃないかっていつも使ってる名前は）」

「（あ、うん。学校の名簿にはフラット・ブルースカイという名前で登録しておりますが。アンダーリスもふっつーにカイル・アンダーリス？）」

フラットの、トーンが高くなると声が裏返ったりしているのは一つの特徴だろう。慣れればどうってことないものだが。

「（そうだ。真名は一応別にある）」

「（ふーん……。ねえ、アンダーリスって騎士の家系なんだよね？）」

質問してくるフラットは気まずそうな顔をしている。

随分と踏み込んだ内容を聞かれた。まあ、使い魔だしいいか。…自分で言っと思ってたが、使い魔という認識でいいのか……？

「（ああ。俺は長男だから、暫定的に次期騎士だ。ところで、お前は俺の使い魔という認識でいいのか？）」

「（もちろんいいよ？ あ、でも命令されてもビミョーだな……。相棒とか、どうだい？）」

相棒か……。悪くないな。フラットの方へ顔を向けると、いい考えだろとも言わんばかりにニカッと笑っていた。

「（相棒か。いいな、そうするか）」

「（うぬ、相棒よ、よろしくな！ ところで、話を戻すけど。肝心の王族がいらないのに騎士とかどうするの？ あ、プライドとか傷つけたらごめんよ？）」

王族が、いない。14年前に事件が起こってから王族はいない。

そうさ、だが、

「（どこかで生きていらっしやるだろう。そうじゃなきゃ精霊が世界を壊してるはずだ。王の血を引く者が生きている限りアンダーリス家は騎士としての誇りを捨てない）」

「（あ、うんうんわかっただからちいーつと落ち着け。ごめんごめん。シフターの使い魔の小人ちゃん怯えてるよ）」

自分でも気付かないうちに気持ちが高まっていたらしい。シフターって誰だ的一瞬间考えてしまったがそういえばロジスの孤児院名だったはずだ。隣を見ると小人が今にも泣き出しそうな顔をしていて、ロジスは急に泣きだしそうになった小人の対処に困っていた。

「（小人は人の感情取り込みやすいからねー。気をつけるよー）」

小人を一生懸命宥めているロジスに少し申し訳ない。

真名の交換儀式が終わった女子生徒がフラットの隣に座る。

どうやら真名の交換儀式はロジスの番になったらしく、小人を抱きかかえて教壇へ歩いていった。大変そうだ。すまない、と心の中で謝っておく。

そうだ、ロジスはシフター孤児院出身だったな。フラットも孤児院出身だったはず

フラットの隣の友達はロジスの次らしく、二人で会話したあとロジスと同じように前に歩いていった。

「（さつきは取り乱してすまなかったな。フラット、お前孤児院出身だよな？）」

孤児院に対して孤児院出身の事を聞くのは気が引けるが、主人——いや、相棒として相棒の事はわかっておきたい。

「（あ、うん、そうだよー）」

本人はなんでもないことのように対応する。どうして孤児院出身の奴らはどうとも思わないのだろうか。こちらとしては気まずい無いうように思えて仕方がないのだが。

「（ブルースカイ孤児院の出身なのか？）」

フラット・ブルースカイという名前から察するにフラットが名前  
でブルースカイが孤児院名だと思われるが……。

「（あ、ちよつと待っち）」

フラットの前に座っている女子生徒——使い魔は黒と灰の虎模様  
で赤いバンダナをした猫——の番が来たらしく、肩を叩いて声を掛  
けていた。

あれ？　じゃあ次は俺達の番じゃないか？

こちらを再び向いたフラットからテレパシーが届く。

「（いや、フラット孤児院だよ？）」

……え？　じゃあ

「（ブルースカイが名前か？）」

「（いや、違うよ！。それはキヤムが付けた愛称なのさ。一応名前  
として使ってるけど）」

フラットはそういつて頭を動かして俺に隣の女子生徒を見るよう  
促す。

どういうことだ？　え、じゃあ名前は……？　キヤムって……そ  
の隣に座ってる女子生徒の名前か？

「（真名の交換儀式とかオレにや関係ないんよ。ま、簡潔に言つと  
オレは名前がありません、なのさ）」

名前がない、だと？　どういうことだ。

意味がわからない。真名の交換儀式のために立ち上がり教壇まで  
歩く。数メートルしかないその道が、今だけは何百メートルもある  
ように見えて仕方がなかった。

## 07・相棒の名前は（後書き）

テレパシーはやり方説明されたら簡単なんですぞ。  
フラットの目は風とか吹くとチラッと見えます。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 08・相棒の真名は

真名の交換儀式。儀式、という単語があるため、厳かなものだと思うわがちだが実際は簡単だ。

テレパシーで真名を伝え合うだけ。ただそれだけのシンプルなもの。

だからすぐに終わるものだ。

俺とフラットは教壇に立ち、先生の合図に従いテレパシーを用いて真名を伝え合い始める。いや、俺だけが一方的に伝える形となっていた。

「（真名は、カイル・リノ・アンダーリスだ）」

リノ、という名前。普通であれば、反応するはずだ。こういう名前前は一つの忌み名でもあるのだから。

しかし、フラットは成績が悪い。言い換えれば頭が悪いということでもある。学校でもこの名前が忌み嫌われるのと理由を教えるのだが、それを知らないのか自分の無い真名を伝えてきた。

「（真名は、なーいよんっ）」

どういうことだろうか。確かに孤児は、少ない確率で神霊地で親から名付けられないまま孤児院に引き取られることがある。そういう場合は孤児院の管理者などが神霊地まで赴き、代わりに名づけるはずだ。

どうして名付けをされていないのか。

考えに没頭する俺に対し少し困ったように右人差し指で頬を掻き、先生に「終わりました」と一言かけたフラットは、俺に「後で話からー」と言うと言分の席に戻って行ってしまった。

俺も慌てて自分の席に戻る。

席に戻った俺達を確認しながら手に持った記録用紙を見て、一人の使い魔と名前を一致させていく。基本的には儀式後に使い魔の名前を先生に報告するのだがフラットは元々このクラスメイトな

のでそれをしなくてもいいのだ。

「（アンダーリースー。説明するけど、いい？）」

頭の中にフラットの声が響いて来る。どうやら名前がない理由を説明してくれるらしい。

「（あんね、孤児院に預けられたときに名前がどこにも書いてなかったから、院長先生が神霊地まで行って名付けようとしたらしいの。それが名前の確認。で、『名付け石』にオレを置いても反応しなかったから名前がないって思って『名付けの泉』に行ったんだって。んで名付けたはずだったんだけど、確認のために『名付け石』にオレを置いたら、また反応しなかったらしくってさー。それを何回か繰り返したんだけど全然ダメでね。だから真名がないのさ）」

平然とその事実を俺に告げる、いやテレパシーで送るフラット。

そうなのか……。しかし、『名付け石』が反応しないとはどういうことなのだろうか……。ありえるのか？ 今度実家に帰るときは書物庫で調べておこう。

「今日はこれで解散だ。じゃ、カイルとフラット、ついて来い」  
名前の確認はすでに終わったらしい。先生は俺とフラットを交互に見ると廊下へ出て行ってしまった。

右からロジスに「早く行けよ」と叱咤されてしまったので急いで立ち上がる。使い魔の小人の名前が知れて嬉しかったのか、ロジスはとてもいい笑顔だった。

フラットも左に座っていたキヤムという人と前に座っている人に叱咤されたのかあわあわと立ち上がった。

「ほれ、行こか！」

走って教室の前にある扉まで駆けていくフラット。待て、お前は相棒を置いていくのいか。まあ確かに先生を待たせるわけにもしかないし……。結局俺も走る。

「歩きながら説明するよ」

廊下で待っていた先生は俺達二人を見ると歩き出した。その後ろを二人で付いていく。フラットは少し息が上がっていた。え……。

まさか、今の少しの走りで？ 運動の授業で体力が全然ないのは知っているが……まさかこれほどとは。

「わかつているとは思うが、今から学園長の部屋に行く。色々説明したいことがあってな。あ、フラット」

「はい、なんですか？」

「とりあえずお前は使い魔を召喚するなよ？」

「わかりましたー」

歩きながら説明すると言われていたのに会話はこれっきりで終わってしまった。その後はひたすら無言で先生の後についていく。

フラットもそのことに居心地悪くなったのか顔を下に向けていた。ひたすらに無言、無言。一秒が長く感じる。先生の後ろ姿しか見えないが、その背中はともうきうきしているように感じられる。

学園長室の扉が見えてきた。早く着けと縋るような眼つきで前を見る。

先生は扉の前で立ち止まり、こちらを振り向いた。

「お前らに会ってほしい人が居るんだ」

「会って欲しい人？」「会ってほしー人？」

言おうとしたことがフラットと重なり、二人でお互いを見合わせる。とても微妙な顔をされた。少しグサッと来たかもしれない。

「そうだ。別に会わなくてもいいんだけどな。本人が会いたいって、直々に」

会いたい？ 物好きか、或いは研究者だろうか。人を召喚は珍しいしな。

先生はまたドアの方に振り向く。重々しい雰囲気のある扉の取っ手に手を掛け、ゆっくりと押し開ける。

中には人がいた。学園長先生と若い20代ぐらいの女性と、若い子供。

先生が若い女性と幼い子供に微笑むと、若い女性は先生に微笑み返し、幼い子供は自らの短い手足をこちらに突き出して満面の笑顔で「たー！」と出迎えた。

先生が進むあとについて中に入る。先生がその幼い子供を抱き上げると、幼い子供は嬉しそうに手足をバタバタ動かした。扉は開きっぱなしだったのでフラットが閉めていた。

しかしこの女性……、見たことある気がする。

それは教科書だったか、実家の書物庫で見たのか。よく思い出せないが、見覚えがあるような……？

「はじめまして。クーノ・ウドと申します」

柔らかい笑みを携えて、右手を出し握手を求めながらこちらに近づいて来る若い女性。いや、ウドさん。

名前を聞いた途端、俺はこの女性が誰なのか気がついた。

「人を、初めて召喚した人……」

「あら、ご存じでしたか？」

使い魔として初めて人を召喚し、今もツアーグラウンドでその名を馳せて活躍している魔法使いの、クーノ・ウドさん。それが、この女性の正体だ。

## 08・相棒の真名は（後書き）

幼い子供がめっさ先生に懐いちゃってる。一応名前は考え済み。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 09・はじめて人を召喚した女性

学園長室に設けられた客人用のソファで紅茶を優雅に啜るウドさん。隣に座っているフラットは緊張した面持ちで背筋をまっすぐ伸ばしていた。

幼い子供がウドさんに近づいて「ママー」と縋りつく。そうか、この子はウドさんの子供か。

え、子供……？ ウドさんが結婚していたのなら噂にならないはずがない。俺が生まれる前に結婚した可能性もあるが。

そういえばウドさんの使い魔、いや相棒（？）の方はどこだろう。相棒の方の名前は知らないな」と思いつつ娘さんを目で追う。

娘さんの後ろで先生が困ったように笑っていた。ウドさんは優しく娘に声を掛ける。

「ごめんね。お母さんは今からそこのお兄ちゃん達とお話があるから……」

母親の言葉に納得いかなかったのか娘は泣き出してしまった。先生はすぐさま抱き上げあやす。

「この人に色々教えてもらえ」

そう俺達に言つとウドさんの娘を連れて廊下に出て行ってしまった。

ウドさんが先生を信頼しているのかは知らないが、娘を連れ出されたというのにまったく焦っていなかった。

娘に縋りつかれた際に机置いた紅茶を再び手に取り、また一口。

「お二人も、お飲みになったら？」

「は、はい、頂きます！」

反射的に紅茶を手には伸ばすフラット。作法も何もないその飲み方は雑だが汚くはない。市井の生まれとはそういうものだろうか。

そう考えながら俺も紅茶に手を伸ばし、貴族らしく、しかし目上の人が居るのを心に留めながら飲む。

「さて、本題に入ろうかしら」

「ごくりとひとつ、唾をのむ。それを待っていた。先生は先程いる教えてもらえと言っていたが……。」

「あ、大したことじゃないのよ？ 何か困ったら、頼ってほしいの。同じ立場の人として、ね。ただそれだけ」

「ただそれだけで、わざわざ来てくださったのか。これは、感謝しなければ。」

「ありがとうございます」

「ふふっ、いいのよ。わたしが頼ってほしいってお願いしてるだけだしね」

「なんて優しい人だろうか。隣を見ると、フラットが目を輝かせていうかメガネを輝かせて？ ウドさんを見つめている。」

「私達のような一介の子供にそこまでしてくれてありがとうございますっ！」

「あ、初対面の目上の人にはしつかり一人称を正すのか。」

「いいのいいの。わたしがしたくてしてるだけなんだから。じゃ、ちょっと用事があるのでこれでお暇させていただきましたわ。先生、紅茶おいしかったです。ありがとうございました。」

「流れるような動作で立ち上がり、学園長に一礼。忙しい中、わざわざ俺達のために……。いや、他に目的があつてそのついでに来たのかもしれないけど、そういう考えであっているだろう。この部屋に入る前に先生が、ウドさんは会いたいと直々に思ってくれたと言っていたし。」

「ワシからは特に何かあるわけではないが……」

「部屋から出ていくウドさんを横目に見ながら、机の引き出しの中から何かを取りだす学園長。俺達はその間にソファに立ち上がり、机の方に近付く。机の上に出されたのは……灰色の、バンダナ？」

「お主らにはまだバンダナを配っていなかったらどう？ アイツに何色にしたらいいか相談されてな」

「顎をしゃくって後ろを見るよう促される。そこには困ったように

頭を掻いている先生が居た。

ウドさんの娘さんが少し開いた扉からこちらを覗いている。ウドさんにひっぱられたのか扉の向こうに見えなくなってしまった。扉が無機質な音を立てて閉まる。

フラットと二人揃って学園長の方に向き直る。机の上にはさつきと変わらず灰色のバンダナが二枚置いてあった。

「ほれ、付けんのか」

その言葉に嬉々としてバンダナを取り、右手首に巻きつけ始めたフラット。その顔はどこかうれしそうだ。学園長の視線を感じ俺も慌ててバンダナを手取る。どこに付けるか迷ったが、普通に手首に巻いた。

学園長は二人とも手首に巻いたのを確認すると、大きく一つ頷いた。

「お主らはもう帰りなさい。明日からの勉学に励むようにな。お前は少し残れ。少し話したい」

はい、と声を揃えて返事をして部屋を後にする。先生と学園長の話が気になるところだが、別に盗み聞きをしたいというわけではない。

男子寮と女子寮までの道のりは別れ道まで一緒だ。フラットと一緒に帰った方がいいのだろうか。少し気恥ずかしい年頃だが……。学園長室の前で止まったままの二人の足。

フラットも少し悩んでいるらしい。言いくそうに口を開いてパクパクさせたあと、うー、あーと少し声を出してから言った。

「よし。相棒よ、一緒に帰ろうではないか！」

……元気だな。断る理由はない。そうだな、と一言返して歩き始める。最初は無言だったが、それに耐えかねたフラットが話しかけてきた。

「あんさ、オレ達のクラスで灰色の無属性だったの、キヤムだけだったじゃん？」

「キヤム？ ああ、お前の友達か」

一瞬キヤムというのが誰の事かわからなかった。誰の事かわからなかったのを察したのか、フラットがからかってくる。

「頭はいいくせにクラスメイトの名前さえ覚えてないのか相棒。しつかりせい！　んで、昨日話したんだよね。キヤムと。灰色がいいねーって。あ、オレキヤムと寮、同室なんだ」

同室……。貴族は基本的に一人部屋で、二人で使うのは孤児院出の人たちだけだ。フラットはクラスの中心人物であり、夕食時にたまに見かけて庶民服を着ているのをみて孤児院出なのは知っていたがキヤムという人もそうだったとは……。

「だから灰色ですつごくうれしんだよねー」

「そこまで嬉しいものなのか？」

「なーに野暮なこというの！　うれしいに決まってるじゃないか！　友達と一緒になんだぞ？」

「お前、友達多いだろ？　他の奴らと違う属性になってるじゃないか」

クラスの中心であるフラットだ。名前は知らなかったが、社交的な人だなとよく思っていた。そして友達も多いはず。

「確かにみんなとは違うけどさ。やっぱ、キヤムと一緒になのが、一番うれしいから」

幸せをかみしめるように口から言葉を紡ぎだしているフラット。キヤムという人とは特別仲がいいのだろうか。孤児院出で気が合うのか？

「そついやさつきウドさん、学園長に先生って言ってたね。ここの卒業生かな？」

「ああ、そついえば。そうかもしれないな。」

話しているうちに男子寮と女子寮の別れ道まで来てしまった。左に曲がろうとする俺に対し、右に曲がろうとするフラット。足を止めてこちらを振り向き

「明日からも、よろしくな！」

というと、素早く駆けだして行った。よろしく、か……。昨日はど

うしようもない気持ちになったが、今日は……。

「（おう。よろしくな）」

テレパシーで、返事をする。

あ、ウドさんに相棒はどうしたのか窺うのを忘れた。と思いつつ、これから良い日々が過ごせそうだと思った。

## 09・はじめて人を召喚した女性は（後書き）

先生に対してはすでにオレ口調なフラットです。  
先生と学園長が何を話したかなんて知りません。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 10・好戦的な少年は

「（アンダーリス、いや相棒！。一緒に夕飯食おうぜ！ 食堂の扉んトコで待ってる！）」

「（お、おう）」

シャワーを済ませ私服に着替えたあと、夕食に行く準備をしていた時、唐突にフラットからテレパシーが入る。

「（あ、キヤムとか一緒にしちゃうけどい？ そっちも友達一緒にいいから！）」

「（わかった）」

あちらが友達を誘うならこちらも誰か誘って行くべきだろうか。

女子に囲まれて一人で食事、なんてことになるのは避けたいからなロジスでも誘うか。いやしかし、ロジスを自分から誘うのは気が引ける。ロジスと同じ部屋のアイツには会いたくないし……どうするか。

悩みながら、部屋のドアを押しながら廊下に出る。

反対側の壁には、寄りかかっているロジスがいた。朝と違うのは小人を腕に抱いているのと、困ったような顔をしていること。

「よー……」

「どうし、っ！」

覇気のない顔で言葉を発するロジスが気になりどうしたのかを問おうとして途端、ドアの陰から何かが飛び出し、俺の膝を狙って蹴ってくる。突然の襲撃に驚くもすでに慣れたことなので、攻撃をいなしでかわす。

「ちえー！ またかわされちゃったよー……」

ロジスが困っていたのはこのためか。

駄々をこねるように口を突き出し、不機嫌そうにする一人の少年がそこにいた。背は低く、ロジスの胸ぐらいの高さしかない。ロジスも十分中世的だが、こいつはもっと中世的な顔立ちで、下手をす

れば女と見間違えることもあるが、好戦的な目がその誤解を招かないようにしている。頭には手のひらよりやや大きなサイズの龍を乗せている。

ロジスのルームメイトであり、同じ孤児院の出身で、名前はチェリア。本名は知らないが、ロジスはいつもそう呼んでいるので俺もチェリアと呼んでいる。

「いい加減やめてくれ……。で、俺に何の用だ」

三人で歩きだしながら、チェリアに目的を問う。チェリアはいつも自分のクラスメイトと食事をとっているはずだ。なのにどうしてロジスと一緒に俺の部屋の前にいたのだろうか。

「今日クラスメイトから、君がフリーを召喚したって聞いてさー」

フリー……？ 召喚したってことはフラットのことか。……こいつ、そういえばフラットと仲が良かったな。クラスは違うのに。廊下でこいつとクラスの中心人物が喋っていてどんな関係だろうかと何気なく思ったことがある。

「ロジーも言ってくれなかったんだよ？ ひつどいよねー」

「いやあ言ったらお前が何かやらかしそうで……」

それに緘口令が出てたし……。とは言えないので口をモゴモゴさせるロジス。

なにそれ！とロジスに対して軽く怒りをあらわにするチェリア。しかしそれは傍から見れば仲良くじゃれあっているようにしか見えない。

「で、何の用だ？」

話が逸れたためにまだ意図を説明してもらってない。急かすようにもう一度問う。

「主人と使い魔なら、一緒にご飯食べるのかなーって。僕もフリーと一緒にご飯食べたいしね。だから君の部屋の前で待ってた」

「それはわかったが蹴りは必要ないだろ」

「いつものことじゃん。それにどうせ君はかわすしね。別にいいじゃん。」

次期騎士たるもの、それぐらい避けなくてどうする。

まあ意図はわかった。元々ロジスは誘うつもりだったし……、いか。先程一緒に食べる約束をしたばかりだというのに……。俺がいつも通り一人で食べるつもりだったらどういうつもりだったのだろうか。

チラッとチェリアの頭の上のミニサイズな竜に目を向ける。首には、いや、バンダナがその体には不釣り合いに大きいために身体に赤いバンダナが巻いてあった。

チェリアは首に赤いバンダナを巻いていた。左肩の方に結び目がある。

これ以上見るとチェリアに睨まれそうだったので前に視線を戻す。その後はみんな話さなくなってしまう。

途中、眠っていた小人がロジスの腕の中で目を覚まし、ロジスが爽やかな笑顔で小人に「お目覚めしましたか」と言いながら頭を撫でていた。左から俺、チェリア、ロジスと並んでいるため、顔はよく見えなかったが、ロジスを見るチェリアは背中が少し寂しそうに見えた。

「別に撫でてほしいわけじゃないから！ ロジーなんて知るかばーか！」

それに気付いたロジスがフツと笑って同じようにチェリアの頭を撫でると、頬を膨らませてキツとにらみながら走り去ってしまった。「あれ、照れてるだけなんだよ」

……都合のいい解釈だな。

ロジスを見ると、非常に楽しそうな顔をしていた。人の嫌がることをわざわざして……。まったくこいつは。

角で左に曲がれば、目の前には女子生徒が見え始める。少し歩いて右に曲がればそこには食堂がある。

食堂の扉の前にはチェリア、フラット、キャム、そして灰と黒の虎模様の猫の使い魔を持つ栗色の髪のクラスメイトがいた。

四人で丸くなり、仲良さげに喋っている。今は規定服ではなく、

庶民服を着ているためか、傍から見たらチェリアは女子のように見える。栗色の髪のクラスメイトは貴族の服だ。

フラットがこちらに気付き、手を振ってくる。同じように手を振り返す。

四人と合流し、一緒に食堂の中へ入た。

食べながら、世間話を話してわかったことと言えば、栗色の髪のクラスメイトの名前がモニーと呼ばれていたぐらいだ。

なかなか会話に入らない俺を、たまにフラットが心配そうに見てきたが

「（こういうのは少し苦手なんだ）」

と話すと納得したようだった。

俺が話の輪に入りやすいように、話題をかえて質問してきたりするフラット。そういう気遣いができるのはやはりクラスの中心なだけはあるなと思った。

## 10・好戦的な少年は（後書き）

フラットは配慮出来る子。

フラットは私服〓部屋着みたいなもんです。

昼食シーンがないぞ。何故だ。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 11・小人と小竜の名前は

「（今日も一緒に食べよう？ キャンとモニーとチェリアとロジスと！ 昨日と同じく食堂の前で待つとる！）」

規定服に着替え、色々な準備を済まし部屋のドアを開けた途端にチェリアから頭部を狙った蹴りを頂戴しそうな所でそれをかわし、今日はもうフラットと食べないと思うぞ、とチェリアに呆れながら言った時、フラットから朝食のお誘いを貰った。

唐突に発されたテレパシーに驚き一瞬の硬直。

「（っ、わかった）」

「（んじゃ！）」

「急に固まってどうしたの？ ぼく、昨日フリー達と一緒に食べるって約束したから大丈夫！」

いつの間にそんな約束を……。

「そう……か。じゃあ一緒に食べるか。丁度今テレパシーでそのことについて言われてな。ロジスはいいいのか？」

「ボクはいいぜ？」

「じゃあ六人で食べるってことで良いよね！ 昨日みんなの使い魔の名前とか聞き忘れちゃったし」

廊下を歩きながら会話をする。そういえば使い魔の名前、訊いてないな……。

そこでようやくロジスの使い魔とチェリアの使い魔がないのに気づいた。小人はロジスの腕に抱かれても足元で歩いているわけもなく、ミニサイズの竜——いや小竜と呼ぶことにするか——もチェリアの頭に乗っかっているわけでもない。

俺の探すような視線に考えていることを悟ったのか、ロジスが親指で後ろを指す。

するとそこには小竜を抱きかかえて歩いている小人がいた。睦ましい様子でじゃれ合っているが、小人が無意識に小竜の首を絞めてし

まっている。小人は小竜がジタバタともがくと、何があつたのかよくわかってない様子だったが小竜を床に一度降ろし、再び抱き上げていた。

「ぼくの使い魔はルギーだよ。ロジの使い魔はステイー」

「ステイラーキ、な」

チラッと後ろを見て小竜と小人を見ながら名前を覚えてくれるチエリア。小人にもいつも通り皆にするように愛称を付けたらしく、それをロジスが仕方ない奴だともいうに訂正した。

小竜の名前はすでに愛称化されてルギーとなっている可能性が高い。本名はルギーではないだろうな。

「僕はステイラって呼んでる。な！」

「ん！」

ロジスがステイラーキに生き生きとした声で同意の言葉を求めると、同じように、しかし愛らしい声で頷きながら返事をした。

「ぼくはステイーね。キリー、お前はどうすんの？」

……どうしようか。チエリアにキリーと呼ばれたのは久しぶりだな思いつつ、

「なんて呼べばいいんだ？」

後ろ歩きをしながらステイラーキのくりくりとした目を見て質問する。

「な、ん、で、も、い、い、よ」

ステイラーキは一度ルギーをぎゅーっと抱きしめて頼ずりしながら答えた。

なんでもいい、か……。じゃあ

「ステイーでいいか？」

と尋ねる。

「ん」

ステイーって呼びやすいなと思ってな。

ロジスとチエリアの使い魔の名前はステイーとルギー。よし、覚えた。

そのまま雑談しながら少し歩き、食堂に近くなつたところでロジスが後ろゆつくり歩いていたステイーをルギーごと抱きあげた。チェリアも手を伸ばしてルギーをステイーの手から抱き上げて頭に乗せる。

その光景を横目で見ながらさつきと比べてもステイーと俺達の距離変わってないなーと思つた。しかしそれはほんの少しの違和感であり、脳がどうでもいいことだと判断したのですぐに霧散してなくなる。ちよつと走つたのかもしれないと頭の中で結論を出したからだ。

食堂の前でフラット達と合流し、扉をくぐつて中に入る。

昨日の夕食では、庶民服と貴族服を来た男女がつるんでいるのが珍しいため周りの人から興味がある視線を貰つたが、今は規定服を着ているのでそれはない。しかし、同じ学年の中で少なからず人を召喚したのが噂になつてゐるのかたびたびそのことについて声を掛けられた。……主にフラットが。友達多いよな……。

空いてる席を探して座り、俺とフラット以外がそれぞれの使い魔にここで待つように言い、厨房の配膳コーナーへと向かう。テレパシーを使うほどの事でもないからな。

「どうでもいいことだけど、配膳コーナーって使い魔入るの禁止だよね？ フラット入っちゃっていいわけ？」

ちよつとした疑問をフラットに投げかけるチェリア。そういえばそうだが……。

「別にオレはいいつしょ？ ダメなら注意されるだろうし」

「そうだよねー」

フラットはどうでもいいと言うように自分の考えを述べると、チェリアも納得したように相槌をうつた。

列にモニー、キャム、フラット、チェリア、ロジス、俺と言う風に並び、積み重ねられているトレイを上から取る。この料理はバイキング形式なのだが、フラットは辛い料理、香辛料が入つていそうな料理をすべて避けていた。

昨日の夕食時に分かったことなのだが、フラットは辛いものが苦手らしい。香辛料が入っているようだった肉料理があったのだが、食べてもさほど辛さを感じないということでもニーのトレイから少しその料理を試し食いしたところ、かなりヒーヒー言っていた。

本人曰く、

「辛いマジ無理っす」  
とのことだ。

## 11・小人と小竜の名前は（後書き）

ルギーは某幻の携帯獣から連想。

この6人は朝食、夕食時のグループを形成しますのです。まじ昼食  
どこいった。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 12・いつも通りの少女たちは

ワンちゃんの身体も綺麗に拭いてつと。

ドライヤーで髪の毛を乾かしながら考える。洗いつこしてるときは言うか言わないか迷ったけど、やっぱりブルーにも言つとこ。どんな反応されるかな……？

「あの、ね。ワンちゃんについて話があるんだけど、いいかな？」

髪の毛は自然乾燥派だというブルーは髪の毛を濡らしたまま、二段ベツトの上で本を読んでいた。

「（マスター……？）」

「（ブルーは家族みたいなものだから、話しておくね）」  
「ん、いいよー。何？」

読みかけの本にしおりを挟んで閉じ、手を柵にかけて体を乗り出してくる。体重を掛けられた柵は古いため前に揺らぎ、それに付られてブルーもバランスを崩す。不安定な体制になり、体重を腕にかけていたブルーはそのまま上から落ちた。

「うぎゃー！」

ドコツつと音を立てて地面に落ちるブルー。

「マスター！ この人大丈夫！？」

「いつものことだから大丈夫だよ」

もう何回目なのかわからないぐらいこのことを繰り返すブルーに呆れながら近寄る。ワンちゃんは少し騒いでたけど、あたしがなんでもないようにしてたら冷静になったのか静かになった。ブルーも少しは学習していいんじゃないかな……？

「いった、いった、た、て、て、いた、て、てー。……んうー。……ふう」

右膝を打つたらしく、四つん這いの体を置きあがらせて左足で飛び跳ね出す。苦痛を口に出すことで痛みを和らげる。数秒経つと痛みが治まったのか右足をゆっくりと床に付けた。

「また痣増えたちくしょー……」

「気をつけなきゃダメだよ？ 何回言えばわかるかなー？」

ブルーはアハハ、とそれを笑い流しながら右膝を確かめる。あたしの視線も自然とブルーの右膝へ。そこには少しだけ変色した二センチぐらいの円ができていた。

「後で絶対青くなるね。マジないわー……。あ、そうそうキャムー」  
「ん、何？」

「テレパシーにはテレパシーで返した方がいいよ？」

「……え、なんのこと？」

ワンちゃんからテレパシーなんて貰ったっけ……？ 顔をゆつくり動かしてワンちゃんに目を向けるけど、ワンちゃんにもそんな覚えはないらしく首を傾げていた。

「え、テレパシー貰ったんじゃないの？ いつものことだから大丈夫だよって言ってたじゃん？」

あ……。そっか、ブルーにはワンってしか聞こえないんだもんね。他の人もそうだよな。次から気をつけようと思いつつ、正にことについて言おうと考えていたところだし、丁度いい。

「あのね、ワンちゃんが教えてくれたんだけど、あたしワンちゃんの言ってることが分かるらしいの！」

数秒の沈黙。

ブルーは表情を崩さず口を開けて呆けている。ブルーがそうしてるときは考え込んでいる証拠だ。

「……その耳？」

結論に達したようで、首を傾げてあたしに質問をしてきた。ブルー、頭の回転はすごく早いもんね。飲み込みも早いし適用力もあるし。

「（マスター、この人は耳の事についてしってるんですか？）」

「（うん、知ってるよ。ブルーは昔からずっと一緒にいるもん）」

「うん。なんかこれ、ミックスっていうらしくて。あたしもよくわかんないんだけどね」

よくわからないけど、そんな詳しく知りたいと思ってるわけでもない。知りたくないわけじゃないけど尋ねようとも思わないっていうか。

「ふーむー……。つまり、そいつの鳴いてる声っていうか言ってることがわかると?」

「うん、そんな感じ。だよ、ワンちゃん」  
「うんっ!」

右手を拳にして口にあて、要約があっているか尋ねるブルー。それは合っていることなのでワンちゃんにも同意を求めるとワンッと一鳴きした。

「……ま、この部屋でワンちゃんと喋る分にはいいけど。キヤムもわかってるだろうけど、外じゃ……ダメだよ?」

「うん、わかってる!」

わかってる。だからこの耳だつてヘッドドレスで隠して生きてきたし。奇異の目で晒されるのはあたしだって嫌だもん。

ワンちゃんのも今ので鳴いてあたしと会話することの良くなさがわかったみたい。

使い魔の犬がワンワン鳴きながらテレパシーを飛ばしたとして主人が言葉に出して返事するのはおかしい。そのうちボロ口みたいなのが出れば使い魔と喋ってるのがバレる可能性は少なくないけどある。

ブルーはそこらへんを考えて、あたしのために言ってくれてる。

やっぱり、

「ブルー、大好き」

そういうと、口をへの字にしたり唇を口の中に隠すようにしたりキョドったりして真っ赤になる。平静を保とうとしてるのかな。口をパクパクさせた後に呼吸を置き、いつもの顔に戻る。

「オレもキヤムのこと大好きだ!」

感情が籠ってないような、棒読みだと思われてもおかしくない声色で答えて抱きついて来る。ブルーの濡れたままの髪が顔に掠める。

こういうときのブルーって大抵は恥ずかしがってるだけなんだよね。ブルーは「いやっほー」と意味不明な裏返った声を出してあたしの背中にまわしていた手をほどいた。あたしの顔に視線を戻すのが恥ずかしいのか俯いたまま。

「（マスター、は、そっちの気があるんですか？）」

「（違うよ！ 家族愛だよ！）」

固まっていたワンちゃんが思考力を取り戻す。勘違いされたので訂正する。

これは決して恋情じゃない。家族愛。ブルーもきつと同じなはず。ブルーが「あつ」と声をあげる。

「青くなってる……」

腰を曲げて見る先には先程ぶつけて出来た痣。ブルーははあ、と一つ溜息を吐いた。どうやらもう気にしないこととしたらしい。

二段ベットに備え付けられている梯子をのぼりはじめるブルー。

それを尻目にあたしも下のベットに座る。

あたしも昨日途中まで読んだ本読もつか。

ワンちゃんに「おいで」といって膝に乗せつつ、夕食までに読み終わるかなと思いいながら菜を挿んであるページを開いて捲り始めた。

## 12・いつも通りの少女たちは（後書き）

頭の回転は速いけど勉強無理なんだって。悪知恵働くタイプだな。別に百合じゃありませんよ！

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

### 13・初授業の道のりは

朝食が済めば授業が始まる。

今日からの授業は使い魔と共に往くことになるため、一旦それぞれの寮に鞆を取りに戻り、男子寮と女子寮の合流廊下でフラットと待ち合わせをして第二学年の無属性の教室へと歩き出した。

フラットに恋愛感情を寄せているなんてことはないのだが、女子と二人きり、という状況に心なしか少し気恥ずかしさを感じる。まるで恋人みたいだ。

同じ学年の中ではすでに俺とフラットが主人と使い魔（相棒だが）という関係であるのはすでに知れ渡っており、他の学年にも「生徒が生徒を召喚した」というのは広まっているらしい。

ただ、他の学年の人は噂を知っていても俺達の顔は知らない。だから俺達の新品の灰色バンダナを見て第二学年だと判断した人たちが、一緒に教室まで行く恋人だと勘違いして茶化したりしてくるのだ。使い魔はネズミなどの小さな動物である可能性もあるため、俺達の周りに姿が見えなくても何処かにいるものだと考え、噂の生徒達であるとは思えないらしい。

道中勘違いされて茶化され二人で気まづくなるどころか、フラットが絡まれたあとにその人たちに見えなくなつた途端に顔をゆがめとても迷惑そうにし（あいつらの目は節穴かつての）とテレパシーで暴言を吐いたりしながらも、隣を歩くフラットは少しくきうきしているよう感じられた。そういう俺も少しは楽しみである。

今日は使い魔召喚儀式や真名の交換儀式後の初授業、兼属性別の授業となるため、魔法を覚えることに期待を膨らませる生徒は俺やフラット以外にもたくさんいる。

これまでの一年は魔法に関係あることないことを学んできたが、魔法を使う授業はしていないのだ。

元々この学園というものは軍を育てるためにある。魔法学園で学

び、魔法使いとなつて軍に入るのは大抵が貴族の次男以下の人たちであり、各所で王族の警護のためにあるものであつたため、地理などの知識を身につけるために最初の一年は勉学に励み、次の年に使い魔を召喚し自らの属性を知つた後に魔法を学び始める。

当初、貴族の長男たちは別の学園で一族の長となるための教育をしていたが、民衆は「貴族は魔法学園に入る」と考えるようになり、貴族達も「長も自分で身を守るようにならなければならない」と考えるようになったため、男子達はすべて魔法学園に入るようになった。

そして女性の社会進出が進んだ後は誰かが女子も軍に入るべきだと唱えたために女子も魔法学園に入るようになったのだ。

軍は他国と戦うためのほかに王や王女の命令に従うことしかなく、数百年戦争があつた試しはないため、王や王女から請け負う任をすればいいだけである。その上、婚約者が決まっていない娘に舞踏会などで婚約者を探させるよりは、貴族の男子がいる学園に入れて日々近い所で一緒に過ごすことで経済的にも内面的にもいい人を見つけた方がいいと貴族たちが判断したため、今では貴族の男女のほとんどが魔法学園に通っている。

中には色々な事情により素性を隠している人もおり、これは真名を隠すのとは違い、名字を隠し偽名を使っている人も少なくはない。

例えばモニー。昨日の夕食時に貴族服を着ていたが、左胸に家紋の刺繍が施されてなかつたので恐らく偽名を使っているだろう。まあ俺は名字をしらないのだが。

「この学年の灰色の先生ってオレのクラスの先生だよー。そこだけ新鮮味がないんだよね……」  
「そうだな」

テレパシーを使うような状況でもなく、普通に話しかけてくるフラットに一言返事をする。属性によって学年ごとに別れるため、クラスメイトも変わるし属性によつては人が多かったり少なかつたりの違いもある。そこに新鮮味を感じるのはみんなも一緒だろう。

灰色。何か引つかかる……。あ、そういえば

「そういえばキヤムはどうしたんだ？ あいつも無属性だろ？」

なぜ一緒に来なかった、という疑問も含めて訊く。そうすればこういう、二人きりで歩くなanteeいう状況にはならなかったのにと少し恨めしく思う。

「あ、キヤム？ ちょっとモニターと用事があるっぽー。ルーと一緒にあとから来るんじゃないかな？」

確かルーというのはキヤムの使い魔の犬の名前だったはず。朝食の時にチェリアが訪ねて教えてもらった。

フラットは少しもキヤムを恨んでいる様子はない。俺と二人きりでよかった、なんてことは絶対にないだろう。なんたって「野郎嫌い」と呼ばれるフラットのことだ。男子と話したり騒いだりするのはいいけどそれ以上は絶対に嫌、だそうで。もしかしてレズではないかという噂もあるほどだ。

先程（あいつらの目は節穴か）とテレパシーしてきたのは、お互い迷惑だからやめてですよ、と一方的に考えを押しつけるためだと思われたのだが、キヤムを恨むつもりはないらしい。

三階まで階段を上るとフラットが息切れをした。……こんな体力のない相棒で大丈夫か？ いつもなら左に曲がるが、今日は右に曲がる。その点はいつもと違うため新鮮味があるが、階段を軸として教室の配置が左右逆になっただけである。各属性の先生がいる教室の逆側の教室で授業を受けることになっている。

俺達のいつもの授業の教室は廊下の一番奥の突き当たりにあるが、左右反対となったとしてもそれは変わらない。

「灰色って人が少ないから突き当たりなんだろうねー。オレ達のいつもの教室が一番奥なのもそのせいか。あーなんかあんま上手く言えないや。伝わった？」

「言いたいことはなんとなくわかった。つまり先生が無属性だからこうなってるんだと。」

「そーそー。わかってんじゃない、あーいぼー！」

後ろに回られてバシッと背中を叩かれる。手を大きく振り上げた割には威力がない。手加減したのだろうか。

周りにちらほらいた生徒が次々と他の教室のドアに消えていく。そして漸く無属性の教室に着いた。

「（行くぜ相棒！）」

フラットが取っ手に手を掛けて横へ引く。テレパシーで行くぜと声を掛けられたためか、少し気分が高揚していくのを感じる。

今日からこの教室で魔法を学び始めるんだ、と。

### 13・初授業の道のりは（後書き）

噂は最初は「フラットがクラスメイトに召喚された」です。カイル友達少ないもの（

「アンダーリスがクラスメイトを召喚した」って噂だったら話は違ってました。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 14・男子のような少女の使い魔は

ガラツと音を立ててあけられたドア。いつもの教室とは違い教壇は左手側にある。右手側には木でできた二人掛けの机と椅子が三列に置いてある。生徒の数は少なく三人しかいないようだ。俺とフラツト……、いや俺しか入らないか。俺を入れても四人、後から来るキヤムを入れても五人だ。人がまだ来てないのか、はたまたこれだけなのか。先生はまだ来ていないらしい。

フラツトは教室の中に入るのを渋っていたが、バラバラに座っている生徒達の中で知り合いを見つけたのか小走りで走っていった。

最前列の、ここからだ奥にある右列の席。フラツトが向かう先に視線を合わせるとそこには一人の男子生徒がいた右肘を付いて顎を支えていた。フラツトが自分のほうに走ってくるのを目だけで見ると「やあ」と表情を少しも変えず、男子にしては少々高い声で挨拶した。

……いや、違う。女子生徒だった。スカートを履いている。

フラツトの後ろに続いてその生徒に近付く。その顔には見覚えがあった。すごく凜々しい顔をしていて女子に人気がある男子生徒のような顔。髪の毛を伸ばしておらず、そのことが余計に男子だと錯覚させる。自分のクラスの人ではないが、朝食の際にたまたま見かけたとき、スカートを履いていてとても驚いた記憶がある。貴族ならば髪を伸ばすし、印象に残ったので夕食などの際にもみかけ庶民服を着ていたので孤児院出だろう。

庶民服を着ているときはスカートを履かないらしく、常にズボンを履いているので男子にしか見えなかった。

夏場は首にタオルを巻き、冬には必ずマフラーを巻いていた。ちなみに今は青月なのでマフラーを巻いている。女子にしては声が低すぎないかとも思うが、自らの領地でもそついう領民をみたことがある。

灰色のバンダナは手首に巻いてあった。使い魔の姿は見えない。小さいのか？

フラットも同じことを思ったらしく、机の前まで歩き手を付けて身乗り出すと質問した。

「やあやあダッシーよ。お主同じクラスか。ところで何召喚した？」

「……ああ、これ」

このダッシーと呼ばれた生徒は寡黙な雰囲気を出している。これは……俺達男子よりカッコいいな……。貴族であればかなりの女子生徒の家といい関係を結べそうだ。

静かにそういつとコトツと音を立てて左脇に置いてあったものを机に置いた。灰色のバンダナで風呂敷代わりに使い魔を包んでいるらしい。

「んー？ これ何？ 袋開けていいの？」

「いいよ」

上半身を色々動かしてバンダナの間隙から中を覗いていたフラットが尋ねる。中身を知りたくてたまらないというようにウズウズしている感じを声に孕ませていた。

一方ダッシーという人は先程と同じように目だけでフラットを見て灰色のバンダナに包まれているものに視線をズラすと短く了承の言葉を発した。

許可をもらったフラットは嬉々としながら結び目をほどき始め、俺はそれを見ながらなんとなく顔をあげて教室を見回した。

その途端一人の女子生徒と目が合い、慌てて顔をそらされる。本人も恐らく驚いたのだろうが……、顔をそらされるというのはやはり少し空しいものである。

周りを見ても喋ってるはいない。喋っていたときからわかっていたが、教室には俺とフラットとダッシーという人の声だけが響いていた。つまり会話はみんなに丸聞こえ、というわけだ。

会話に混ざりたいと思ったのか、すこし興味を惹かれたのか。そ

ういう理由で見ていたのだろう。

左から視線を感じダッシーという人の二つ後ろに座っている人物を見るが、目を合わせる前に顔をそらされてしまう。なんだったんだ？

まあいいか、と思いつつフラットの手元に注意を向き直す。

灰色のバンダナの中にあったのは茶色の木箱だった。

……え？　これが、使い魔？　まさか……？

「……えー、と、木箱が使い魔なんてバカなことはありませんぬよー、な？　中？」

フラットが俺の思ったことと同じことを尋ねる。机に置くときに硬い音がしたのは木箱だったからか……と考えつつ、色々な方向から視線を感じたので顔を上げると教室にいる他の二人の視線がこちらを向いていた。正しくは木箱に、というべきか。

やはり聞き耳を立てていたようだ。目が合った女子生徒の使い魔だと思われる鼠や顔をそらした男子生徒の使い魔だと思われる猫もこちらを見ていた。

「うん、中」

教室に入った時から変わらぬ体勢のまま答えるダッシー、という人。相変わらず目だけでしか木箱を見ていない。

「開けて、い？」

「うん」

フラットがゆっくりと灰色のバンダナの上に置かれた木箱に手を伸ばす。左にちらつと視線を向ければ二人と二匹が食い入るようにこちらを見つめていた。

正方形の木箱の蓋の対辺を両手で挟み、ゆっくりと持ち上げる。

そこにいたのは黒い――

「キ、キャアアアアアアアアアアアアアアア！」

女子生徒が立ち上がって悲鳴をあげ、それに驚いてみんながそちらに視線を向けるが、すぐに木箱に目を向ける。ダッシーという人は横目で見て迷惑そうにしていた。

だが……女子生徒が悲鳴を上げるのがわからないわけではない。  
むしろとてもよくわかる。

なぜなら——箱に入っていたのは黒い大きなゴキブリだったのだ。

ゴキブリ。それは厨房に出没し、名を口にすることさえ憚られる黒く光る虫。学園では管理が徹底しているようなので見たことがないが……こんなところで見るとは。箱の周りには綿が詰めており、その真中にゴキブリはいた。叫び声に動じた様子もなく、ただじつとしている。

フラットはそれを見て叫ぶことはなく、三、四回目をパチクリさせると口を開いた。

「あー、それはー、もしー、や？」

悲鳴を上げた女子生徒をチラチラ見ながらダッシーという人に訊く。名前を出さないようにして配慮しているつもりらしい。

外から先生などが急いで入ってくる様子がないので今の叫び声は隣の教室には届かなかったのだろうか、と疑問に思うが自分で答えを見つける。

魔法実技教室は学習教室と違い、魔法の暴発などに耐えるため色々な魔法がかけられていると授業で習った記憶がある。

「うん」

ダッシーという人が口を開く。彼女はチラッと先程叫び声をあげた女子生徒を見てから言った。

「ゴキブリ」

教室にまた叫び声が響いたのは言うまでもないことだ。

#### 14・男子のような少女の使い魔は（後書き）

ゴキブリ。不快にさせてしまった方には申し訳ありません。  
カイルは正式に？知り合うまで名前を呼び捨てとかにはしませんの  
です。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 15・教室を混乱に陥れたのは

叫び声をあげて立ちあがった女子生徒は目に涙を溜めて腕を身体の前で構え、ゴキブリの襲来に備えている。彼女の使い魔は机の上で後ろの足で立って主人をどうにか宥めようとしていた。

一方二回も叫び声をあげられたゴキブリは、叫び声に全く動じず木箱の中で鎮座していた。

「こういう反応されるから、出してない」

ダッシーという人が女子生徒を横目で見ながらいった。とても納得のいく理由だ。使い魔召喚儀式はクラス別に行ったが、おそらく召喚した際にクラスが混乱に陥ったのだろ。ほとんどの女子が叫び声をあげたはずだ。

「でも呼吸できない？」

「木箱の下、穴開けてあるんだ」

「ふーん」

そう答えながらゴキブリが入った箱を持ち上げて下からのぞくフラット。俺も便乗して見ると、そこには確かに四つ角に爪の大きさ程度の丸い穴が開けられていた。

その間もゴキブリは静かに箱に納まっている。

「……ところで、これ、生きてる？」

木箱をゆつくりと机に置いたフラットが何を思ったかダッシーと言う人に尋ねた。

「生きてるよ。ほら」

そう表情の変わらぬ言いながら箱の中の大きなゴキブリを右手で摘みあげたダッシーという人。左の方から「ひっ！」と女子生徒の声が上がる。

主人に摘みあげられたゴキブリが動く様子はない。本当に生きてるのか？

主人が生きているのを証明しようとしているのに動かないゴキブ

りに何を思ったのか、ダッシーと言う人はそのゴキブリを――  
投げた。

上に向かって投げられたと同時に体長およそ十cm、幅およそ五cmの大きなゴキブリは、二対四枚の翅を広げて羽ばたく。

「お、おおぅ!？」

ゴキブリを見て叫ばなかったフラットも、流石にこれには驚いたらしく素早く後ろに四歩程度下がった。俺もそれには驚いたので一歩身体を後ろに引く。

それに少し遅れて反応したのが女子生徒。

ゴキブリが宙に向かって投げられたという事実が信じられなかったらしい。ダッシーと言う人の頭上で円を描いて飛んでいるゴキブリを見て、綿が詰められただけの木箱を見てゴキブリを主人の手元を見てから再びゴキブリを見る。

そうしてゴキブリが飛んでいるのを自分の目でしっかりと確認して「きやあああああああああああああああ!」

と先程よりも大きな声で叫んだ。声が大きすぎて耳が痛い。教室にいる女子生徒以外が耳をふさいだ。

恐怖に耐えきれず叫んだ女子生徒はそのまま椅子によるよるとへたり込んだ。使い魔が主人の身を案じて方に飛び乗る。

男子生徒は使い魔とともにゴキブリを目で追っていた。

ダッシーという人はあゝ、とため息を一つ吐くと、右手を自らの使い魔に対しておいでおいでとでもいうようにパタパタさせる。

するとゴキブリは大きな体を窓から差し込む光に反射させて光らせながら降下する。音も立てずに下降した使い魔はそのまま主人の右手に着地した。さすがに使い魔だけあって野生のゴキブリとは違う……。

ダッシーという人は自分の手のひらに舞い降りたゴキブリを、左手で木箱から出した時のように摘み、そのまま綿の敷き詰められた木箱の真ん中へと入れる。蓋を乗せ、下に敷いていた灰色のバンダナの対角同士を結びと結び目を持って自分の左脇に置いた。そして

また右肘をついてこちらに視線だけを寄こした。

そのとき教室のドアが控えめな音を立てて開く。

教室の中がさぐるように顔をのぞかせたのはキヤムだった。

教壇を見て先生がまだ来てないことを確認して一安心。そして教室の生徒達を見て不審がる。俺達の姿を確認して近付いて来るその足元には使い魔である犬のルーもいた。

「なにかあったの？」

目に涙を浮かばせて椅子に脱力したように座り込む女子生徒に、使い魔とともにこちらを警戒したように見ている男子生徒。その二人に対して何事もないように肩肘を付いた無表情な男子のような女子生徒。そしてその女子生徒から戦くように数歩離れた俺とフラット。

それを見て疑問を持たなかったら逆におかしい。

「ダッシーの使い魔見てみんなで驚いちゃっ、てー。」

理由を説明するフラットの歯切れがやけに悪い気がする。顔もまづいことをしたとでもいうように顰めているような……。気のせいかな？

「そうなんだ。そんなに驚くの使い魔なの？ 何？」

様子からしてキヤムもダッシーという人とは知り合いなのだろう。ダッシーに質問を投げかけるキヤム。

「ゴキブリ」

短く答えたダッシーと言う人にキヤムは顔にやわらかい笑顔を貼りつけたまま複雑な顔をした。フラットも何かを止めるように出した右手を身体の前に出したまま固まっている。……何かまずいことでもあるのか？

「……そ、そっかー。じゃ、じゃあ授業も始まるし、ブルー、後ろの方行こ！」

「うー、うん」

目に見えて挙動不審なキヤムとフラットが気になるところだが……。

キヤムに手首をつかまれて教室の後ろのほうに歩いていくフラット。本人は先程叫び声をあげた女子生徒が気になっていいるらしかつたが、その女子生徒が姿勢を正し心をもちなおしたのを確認すると、安心したように大人しくキヤムにひきずられていった。その後について行きながら一度ルーの尻尾を踏みかけてしまった。

警戒心が薄れたらしい男子生徒の横を通ってキヤムとフラットが中央列の一番後ろの席に座ったので、俺は右列の一番後ろに座る。教室の中は左右対称なのでドアを除けばいつもと同じだ。だからある意味いつもと同じ席だ。フラットと通路を隔てて隣の席に座ったのは、使い魔と席が離れてるのもどうかと思ったからな。

教室のドアがキヤムの入室した際の音より大きな音を立てて開けられる。

そこから入ってきた先生は教室をぐるりと見回して教壇に立つ。窓の外を見て一度なぞの笑みを浮かべ、授業を始めるために口を開いた。

## 15・教室を混乱に陥れたのは（後書き）

猫や鼠はゴキブリを食べますが、人の使い魔だということで食べませんでした。

キヤムちゃん、ゴキブリは苦手だっというわけじゃないんです。

お気に入り登録して下さった方、ありがとうございます。とても感激しております。うれしいです。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 16・あの黒い使い魔の名前は

「まずは……、挨拶から始めるか」

教壇に腕を立てて生徒六名、使い魔四匹の居る教室を見回して口を開く先生。

「俺が今日からこの第二学年無属性の授業を担当する。普段は灰組の担当をしていて、俺もみんなと同じ無属性だ。生徒とは気軽に話せるようになりたいから砕けた口調で接してくれるとありがたい。あ、でも呼び捨てはダメだからな？」

入学当初の灰組で行ったものと同じの自己紹介。最後に表情を柔らかくして笑いながら、みんなに『先生』と呼ばせることを認識させるた。

隣でフラットとキヤムが何かこそこそ話している。といつても主にフラットがキヤムに小さな声で話しかけていて、キヤムは受け答えをしているだけである。いくら通路を挟んで隣の席であろうと、ささやくような声で行われる会話ははつきりとは聞き取れない。しかし「——名前——わす——去年——」などと言ってることから話の内容は大体理解できた。

先生は去年も自己紹介で名前を言うのを忘れていたのだ。

去年はみんな入学したばかりで誰もそれを指摘することができず、教室には気まずい雰囲気の流れていた。先生が、入学前から家同士で交流があると思われる生徒達が目を合わせては首を傾げたり困った顔をするので、疑問に思ったところ名前の紹介を忘れていたことに気がついた、といつかの授業に言っていた。

初授業からさっそく私語をしているフラットに対して注意をしようと思ったところ、この感じに既視感を覚えたらしい。

眉間にしわを寄せて考えるようなそぶりをした後、何かを思い出したかのように目を一度瞬かせた。

「あ、またやつちゃったよ……ハハハ」

困ったように頭を掻いて再度口を開く。

「名前はチエーカス。よろしく」

前を向いて力強く自分の名を名乗ると、隣でまたフラットがキヤムに何かこそ言っていた。「先生の——らなかった」などと驚いた顔をしながら言ってるのから察するに、先生の名前を知らなかったのだろう。だが灰組のクラスメイトならば、先生が一度名乗っているで知っているはず。つまり忘れていたのだろう。

言っちゃ悪いが、クラス一の馬鹿という称号は侮ってはいけないようだ。まあそういう俺もクラスメイトの名前をすっかり覚えていないわけじゃないが……。

「出席を取ろう。使い魔のお披露目も兼ねるか。じゃあみんなまずは使い魔を見える所へ出してくれ」

この言葉にいち早く反応したのは先程叫び声をあげた女子生徒だった。ハツとした顔をしてダッシーという人を一目見ると、自らの使い魔のネズミを抱きかかえて彼女の方を向いて警戒態勢を取った。先生はそれを不審がりつつ、ダッシーという人を見る。他の生徒の使い魔は先程見えるところにいるし、彼女一人に対しての言葉だったのだろうと思われる。

ダッシーという人は少し顔を顰めると、一つ溜息を吐いて諦めたように右脇に左手を伸ばした。右手は相変わらず頼杖についているが先生は気にしないらしい。

巾着袋の代わりに灰色のバンダナで包まれた木箱がコトツと音を立てて机に置かれる。先生は硬い音がしたことに疑念を抱きつつも、ゆっくりと二つの結び目がほどかれると納得したような表情をしたあとすぐに腑に落ちないともいうような顔をした。

みんなすることがないので先生と同じようにダッシーと言う人を目を向けている。この状況は先程と少し似ているなと思う。隣ではフラットがキヤムを指で突いていた。フラットが顎をあつちを見ろとでもいうように指すと、わかってるとでもいうようにキヤムがダッシーと言う人を見ながら——いや、木箱を見ながら数回頷いた。

灰色のバンダナに敷かれた木箱の蓋が上に持ち上げられる。それだけのことで女子生徒はピクリと反応したのだが、トラウマになっているのだろうか。

そして現れたのは、さつきも見た黒く大きなゴキブリ。荘厳な雰囲気を出してそこに存在していた。

女子生徒はまた反応したがすでに耐性はついたらしく、ヒツと掠れ声を上げるに留まった。

フラットと男子生徒は落ち着いた様子でそれを見ている。

キヤムはいつもゆるやかに開かれた目をしっかりと見開いている。しかしそれは驚きではなく……なんだろうか？

一方の先生はダッシーの使い魔を見た途端、目を大きく開き、口をあんぐりとさせて止まった。しかしそれも一瞬の事で、次の瞬間には優しいような、愛しいような、悲しんでいるような、俺にはよくわからない笑みを浮かべた。その表情は正に大人の顔だった。こういうときは少し先生と年の差という距離を感じる。

「ゴキブリ、か。珍しいものを召喚したな」

ゴキブリ、と先生が言うと女子生徒がピクリと頭を動かした。それにつられて先生も一瞬目を向けるがすぐにダッシーと言う人に視線を戻した。

「みたいです」

「さて、出欠だな」

そっけない対応を流しつつ手に持っていた板を、いやその上に置いてあるだろう紙を見ながら名前を読み上げる。

「ダシタム・アンキヤリー」

「はい」

先生が名前を読み上げるとダッシーという人が軽く手を挙げて返事をした。へえ、本名はダシタムというのか。

「と、使い魔の……ゴッキー……」

板へ向けている視線を右へと流して、怪訝な顔をしながら彼女の使い魔の名前を読み上げる先生。いぶかしむ視線をそのまま上に流

してダシタムという人を見た。隣ではフラットが口を開けずに吹き出していた。といっても口は開けてないので頬が膨らませている。名前を読み上げられた使い魔は、四枚の翅をはばたかせて自分の主人の顔に飛び付いた。

「きゃあっ！」

それを見ていた女子生徒が叫び声をあげる。

ダシタムという人は鬱陶しそうに自分の使い魔を顔から剥がすと、右手を頬から離して蓋を取る。六本の足を動かしてもがいている使い魔を木箱に近付け、蓋も木箱に近付けた。

もう何をするかわかった。無理矢理入れるつもりだ、と思った途端、実際にゴキブリを木箱にねじ込むようにして入れた。……乱暴だな。

……死ぬぞ？

「はい、ゴツキーであってます」

蓋を閉めた後再び頬杖をついたダシタムという人は、先生の不審そうな顔を見ながら答えた。

「そう、か。ゴツキーな」

隣ではフラットがキヤムに笑いを含んだ声でみみうちしている。興奮しているのか小さいながらもはっきり聞き取れる音量だった。

「ゴツキーとかそのままワロスー」

震える声でそう言ったフラットに心の中で同意した。テレパシーは使わなかったがな。

16・あの黒い使い魔の名前は（後書き）

ダシタム君。あれ、授業が始まらない。

女子生徒と男子生徒の名前は次話で。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 17・無属性クラスの生徒たちは

「カイル・アンダーリス」

「はい」

板へ向けている視線を下へと流し、名前を読み上げる先生。

「と、使い魔の。フラット・ブルースカイ」

「はい、欠席です！」

「はいはい、出席な」

俺の使い魔兼相棒の名前が呼ばれ、それにフラットが返事をする。灰組でもよく「フラットさんは欠席です」と自分で言ってるよな……。

灰組ではいつもの事なので、フラットの欠席報告に慣れた先生が子供を相手にするように板にチェックをする。

女子生徒と男子生徒は怪訝な顔をしていたが、噂で「生徒が生徒を召喚した」ということは聞いているのか、納得したような表情をした。俺とフラットの使い魔は自分たちからは見えないけど先生からは見える位置にある、とでも思っていたのだろう。

男子生徒の方が驚いたように顔を後ろに、俺の方に向けていた。口からは小さい声であるがいぶかしむ様に「騎士が人を……？」と言っているのが聞き取れた。

蔑むような目付きではないが、反応からしてこの男子生徒は恐らく貴族だろう。これまではフラットの認知度や交友が広いためにフラットを主体とした噂が流れていたが、これを気に俺を主体とした噂が流れそうだ。しかも悪い方向に。

騎士じゃない、次期騎士だ。と訂正したいが聞かなかったことにする。考えないようににはしていたが……俺の立場だとやはり人を召喚したのはまずい。一番の救いはその人というのが平々凡々ではなく魔法学園の生徒だということだが……。フラットは体力も少ないし、こう言うのはあまり言いたくないがバカだ。せめて今日から学

ぶ魔法がしっかり使えるならありがたいのだが。

「次、キヤム・フラット・ノーシル」

「はい」

いつも通りの優しい声で返事をするキヤム。

ん……？ フラット？

ハツとしてフラットを見る。

凄いい勢いで右から寄こされた視線に気付き、更には理由にも気付いたのか説明しようとしてくれた。一度口を開き、何かを思い出したかのような顔を見ると独り言なのか「テレパシーあるやんけ」と言々とテレパシーをしてきた。フラットお前忘れてたな？

「（フラット孤児院出身って言ったつしょ？）」

呆れたような声でテレパシーを発してくるフラット。いや、そう言われてもキヤムとお前が同じ孤児院出身だとは思わなかったんだ。俺の思っていることがわかったのか再びテレパシーを発してくる。

先生がルーの名前を読み上げたのを聞きながらテレパシーに耳を傾けた。……頭を傾けた？

「（ブルースカイがキヤムの付けてくれたあだ名、って言ったよね？じゃあそれを学園側に言うんだから学園に入る前にキヤムと会ってなきゃおかしいっしょ。だから同じ孤児い、あ。庶民学校で出会ったとかそういうのもあり得つか）」

理由を説明しながら違う結論にも辿りついたらしい。

庶民学校というのはそのままの意味で庶民が行く学校だ。これはその領地内の子供であれば誰でも入れる。孤児でも農民でもなんでもだ。

「（フラットさんはブルースカイって名前がありますがあまり呼ばれたくないのですな。だからみんなにはフラットって呼ぶように頼んでありますの。キヤムにはノーシルって家名がありますし）」

フラットは時折自分の事を指すときに「フラットさん」と自分の名前の後にさん、をつけて表すことがある。これもフラットの特徴の一つか。

「ナルニーナ・ホープウエル」

「は、はい！」

あ、名前が同じだ。と頭の隅に出てきた人を考えながら思う。しかし女子生徒の方は性格がおどしているように感じられる。先程は叫んでばかりだったが、立振る舞いは貴族らしい。ホープウエルという名前は聞いたことがない。俺が知らないだけなのか、偽名なのか。貴族じゃなかったとしても、貴族なのに貴族らしくないこちらのナルニーナとは大違いだ。

「で、使い魔のジェリー」

おどおどしているナルニーナという人の使い魔の黄土色のネズミの名前はジェリー。こちらのナルニーナの使い魔の名前もジェリーだ。正しくはジェリンスだがよくジェリーと呼ばれている。すごい偶然だなと思いつつ、これから友に魔法を学んでいくクラスメイトの名前をしつかりと覚えようとする。

そして最後の一人。貴族だと思われる男子生徒。

「エジーマ・サイクルクリーン」

サイクルクリーンだと？ その名前は知っている。むしろ他の貴族よりよく知っている。悪い意味ではない。父親がよく困ったような、嬉しそうな顔をして言う人の名前だ。多分エジーマという人の父親の名前だろう。

「使い魔はメートム」

猫がメーと鳴く。

……猫が、メー？

フラットがゴツキーの際と同じように少し興奮しながらキヤムと話している。一応小さい声を出しているつもりなのだろうが「ちょ、猫がメーだって！ 羊か！ あれ、山羊？」と、全部聞こえている心の中で山羊だと言っておく。羊もメーで間違いではないがどちらかというとベーと鳴くからな。

フラットの声がエジーマと言う人にも聞こえたのだろう。眉間にしわを寄せてフラットを睨んだ。途端にフラットが身体を小さく丸

め、首をすくめて俯く。

逆にその態度に申し訳なく感じたのか、エジーマと言う人は焦ったように前を向きなおした。前髪の間隙から見える黒い瞳が窺うようにエジーマへと向けられる。すでに気にしてないようだということを確認するとゆっくりと首を元に戻し背筋を伸ばした。背筋はすぐに少し曲げられたが。

「さて、出席も取ったところでお待ちかねの魔法の授業にするか」

先生が言ったその言葉に俺も含めてクラス中の人が良い意味で反応した。寡黙なイメージのダシタムという人までが真剣な顔立ちで先生を見ている。さっきまでの無表情はどこかに消えたらしい。

俺達は今から魔法を学ぶ。色々と思うところはあれど、それは嬉しいことだった。

## 17・無属性クラスの生徒たちは（後書き）

ネズミと猫の名前は某有名なアニメから拝借。

ちなみに羊はべえ〜と声を震わす感じで鳴きます。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 18・相棒の魔法の才能は

「普段の授業で学んだことがあるだろうが、無属性と言うのは戦争がなくても役に立つ属性だ。どのような点で役に立つか知ってるか？」

そういうと、先生は教室をぐるりと見回した。属性の特徴は基礎中の基礎であるから、みんな知っ

「なん——け？」

……どうやら相棒は知らないらしい。キャムにこっそり尋ねていた。

が、先生がダッシーという人、エジマという人、俺、と右から——先生からしたら左から——見ていき、俺の左の人物で視線を止める。

丁度キャムがフラットの質問に答えようとしていたが、先生に視線で直接的にはないとはいえ注意されてしまえば言うことは出来ない。

目を向けられている当の本人は奇妙な、笑い顔と言えるか半端な顔をして下を向いた。メガネから焦っている雰囲気を感じる。……何故メガネから感じるのだろうか。

「フラット。答えてみる」

名前を呼ばれると下を向いたまま頬をピクツと引き攣らせた。そして俯いたままゆっくりと立ち上がる。

「……え、と。……え、あえ」

頭がパニックになっているのか声に焦りが滲み出ている。パニックのために頭が回らないのか、自分で答えようと思っているのかは知らないがテレパシーで俺に訊くことはしないらしい。

いつもの授業ではこのまま「わかりません」と言って違う人に回答権が移る。たまに答えているが……。

「……ざ、雑用です」

……答えた。顔に浮かぶ表情からして精一杯頭の中の知識を振り絞って答えたらしい、が。

「あ……確かに、その通りだな」

雑用だなんて授業は説明してはいないのだ。

先生は困ったような顔をしたあと、腑に落ちたとでもいうように顔を少しだけ呆けさせた。どうやら雑用という言葉に心当たりがあるようだ。

「でも響きが悪い。他の奴にも当ててるぞ」

その一言にフラットが着席する。

先生はそのまま視線をフラットからキャムへ、キャムからナル二ナへと映すとそこで止まった。

「ナル二ナ。お前が答えてみる」

「は、はい！」

慌てたように立ち上がるナル二ナと言う人。バタバタしているが答えることはできるらしい。……まあ、こういう基本問題を答えられないほうが珍しいのだが、と自分の相棒を考えながら思う。

「ひ、日ごろから常に人を手助けする役割です！」

「そうだな。じゃ、座っていいぞ」

慌てふためきながら答えたナル二ナはその一言を聞くと、安心したように息を一つ吐いて座った。立ちあがったときとは違い、座り方には気品がある。やはり貴族なのだろう。

「ま、レアで頼りにもされるけど、所詮は雑用だが……魔法を使うのには変わりはない。それに、無属性と言うのは一番魔法の素質があるといっている。」

雑用と聞いて意気込みが下がっていくエジーマを見て、一息置いてからこの授業の内容をもう一度確認させる。魔法を使う、という点にやる気を復活させたようだ。……エジーマという人は単純なのか。

無属性が一番素質がある？ 授業でやったことはないし、先生が自分の属性を上を持ち上げただけなのかもしれないから真偽はわ

からない。だが先生はそういう性格ではないのだ。

「まずは……色を変える魔法でもやるか」

やっと魔法の授業に入るらしい。変色魔法か……。

隣からは「うわー——雑用——」などと聞こえるがその声には期待が滲み出ている。

「対象にするのはみんなが巻いているこのバンダナだ」

先生はそう言いながら自分の手首に付けているバンダナを外す。

「だが、このバンダナには悪戯、他属性に変装するのを防止するために特殊な魔法をかけてある。それを解禁するから、みんな動くなよ」

魔法を使うのに必要なのは念だ。基になるのはその一つのみである。

念じている間に動かれると照準がずれて失敗しやすい。ウドさんのように熟練された魔法使いは、狙いが動いていても簡単に魔法が使えるらしい。

先生は静かに、一人一人の手首についているバンダナを見ていく。一人数秒かけてバンダナを見ていき、魔法を解いているのだろう。

「よし、いいぞ」

動くなと言われ張りつめた空気が流れていた教室がその一言で一瞬にして気が緩む。

唯一それを感じさせなかったのはフラットぐらいだ。相棒は机に突っ伏していた。寝ている様子はないが動く様子もない。動くなと言われてからそうしているがわざわざ突っ伏さなくてもいいと思うのだが。

「じゃあみんなバンダナを外して変色魔法をかけてみてくれ。あー、キヤム。お前の好きな色を行ってみろ」

「あ、はい、桃色です」

「桃色か。女の子らしくていいな」

先生に褒められたために照れて顔を真っ赤にしているキヤム。心なしかその隣でフラットが先生を睨んでいるような……しかもダシ

タムという人も先生を睨んでいるような……。

二人の視線に困ったような顔をしながら口を開く。

「このバンダナが桃色になるようやってみろ」

その言葉にみんなが念じ始めた。

結果。

俺はできた。ダシタムという人もできた。キヤムは少し俺のより色が薄かったが、キヤムの中では桃色がそういう色なのだろう。エジマという人は灰色と桃色が混じった色に。ナルニーナという人は一部がきれいな桃色となったがほとんどは灰色のまま。

肝心の相棒のフラットは。

……変化、なし。灰色のままだった。

本人は魔法が使えなかったことにショックを受けることもなく、「魔法無理だー」

というように気丈に笑っている。落ち込んでいるのを悟られないように笑っている、という訳でもない。

このことを気に俺はある事実に直面してしまった。

俺の使い魔は体力がなく、馬鹿であり、魔法の才能もない、と。

## 18・相棒の魔法の才能は（後書き）

キヤムが照れたので先生を睨む。ちょっとした嫉妬だと思われ  
キヤムは優秀です。×××××だから。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 19・粘って相棒の魔法の才能は

まだ希望はある。先生の言葉を聞いてそう思った。

「今年は優秀だな……。初めての授業で成功するなんてそうそういないんだ。先生が学生だったときも最初はフラットののように何にもできなかったんだ。だから成功しなかった人も落ち込む必要はないけど、フラットはもう少し落ち込むな」

クラスの中で誰よりもうまく変色魔法が使えなかったフラット。本人は落ち込む様子もなく、へらへら笑っており、魔法が使えないことを誇っているような……？

そんなフラットに先生は呆れながら言った。ある程度は変色魔法を成功させたナルニアと言う人とエジーマという人は少なからず落ち込んでいる。

「あー、でも確かに勉強も体力も魔法もコレだと困りますよねー。国に恩が返せないっていうね」

あはは、と困ったように言うものの、顔はへらへらしたままだ。

そうだ。フラットは孤児院出であり、現在孤児院は王立——王族がいないため国立ともいう——である。だからこの魔法学園を卒業した後は役所で公務員として国のために働くことになっている。十四年前に孤児院が王立となってから孤児たちの生活は昔とは比べられないほど豊かになった。その恩を返すために魔法学園で一生懸命勉強に励み、公務員として国のために働く孤児がほとんどだ。

しかし普段のフラットのやる気のなさからすると、そういう心意気は感じられない。恩を返す気あるのか……？

そして気付く。フラットは俺の使い魔だ。使い魔と言うのは常に主人と一緒にいるものであり……。この学園を卒業したらどうなるんだ？ 厄介なことになってきた。考えるのはやめるか。明日からはあの気味の悪い自慢大会もあるし、父上とも会うことになるだろう。文書だと届くのは遅くなるしその時に相談するとして……。し

まった、フラットにこのことを言うのを忘れていたな。

「頑張れよ。じゃあ残りの時間は各々この魔法を自習してくれ。カイルやキヤム、ダシタムは出来ていたが、今度は念じる時間を少なくするんだ」

「先生はどちらに行かれるんですか？」

「あ、いや、俺はここにいるぞ。何か質問があつたら呼んでくれ」  
エジーマという人の質問に答えると先生は教壇の机に用意されていた椅子に座りこんだ。

教室にいるみんなが念じ始めている。

明日の事についてフラットに話そうかと思ったが、前髪の隙間から見えるフラットの目は閉じて集中している。テレパシーで話しかける雰囲気でもないし後でいいか。

……いや、寝てる？ こいつ寝てないか？

そう思っていると口がゆっくりと開いた。なんだ、起きてるのかと思ったのだが。

……顔が間抜けすぎる。やはり寝てるか。

しかも涎が……。

ヒュツと音を立てて涎が口の中に戻る。それとともにフラットの首がガバツと立てられた。やっと起きたか。

フラットに気を取られていてすっかり練習をするのを忘れていた。俺も騎士として、常に上を目指す姿勢で変色魔法を少しでも上手にしなければ。

「よし、今日はコレで終わりだ。寮に帰ったらコツを思い出すようにして復習するように。以上！」

三時間に及ぶ魔法の授業を占めると、そそくさと先生は出て行ってしまった。

昼食の時間か、と思いながら腰を上げる。

朝食や夕食のように自由なときに来て良いとは違い、昼食を食べる時間は三科と四科の間であるため生徒が同じ時間に食堂に集まってしまう。だがいくら大きな食堂とはいえ学園の生徒全員を収容は出来ない。そのため生徒は食堂に立ち寄って食事を貰った後、自らの寮で食べることになっているのだ。

「お昼だー。あーたるかったー」

隣で机の上にグダーっとなっているフラットは最後まで変色魔法が使えなかった。ナルニーナという人もエジーマという人も上達していたのに、なんだかな……。

フラットはその隣で立ちあがったキヤムにつられるようにしてすくっと立ち上がると、一方的に腕を絡めた。背中を丸めて少しキヤムに体重をかけているようだが、キヤムの方は気にした様子もない。まあフラットは灰組でもよく色んな女子生徒に腕を絡めてるよな……。

フラットとキヤムは自然な足取りでダシタムという人に近づくと話しかけた。机の上にいたルーは跳び降りてキヤムの後ろを歩いている。

「いこー！」

「ん」

立ちあがって自分の使い魔が入った木箱を入れているバンダナを持つダシタムという人。

自分から誘ったにも関わらずキヤムと彼女に無言で、指をまつすぐ上に伸ばして指と指の隙間をあけずにして、停止するよう求めるポーズをするフラット。

念入りに数回前後にその手を動かすと、先程から下を向いたまま座っているナルニーナという人の元へと足を勧めた。

それはいいんだが進み方がとても怪しい。手をぶらぶらと動かして変な重心移動をしている。

ナルニーナという人の席の前で止まるって口をパクパクさせる。手も宙を動いていて何がしたいのやら。

ナルニーナという人もフラットがいることで席を立てなくなっている。

「あ、えあ、い、一緒に。お、昼、食べない？」

「あ、い、いいんですか！？」

「う、うん、いいよ！ むしろ大歓迎！」

フラットは両手をあげて歓迎していることを体で表すと、キヤム達の元へ後走りをしながらナルニーナという人に手招きした。

「あ」

ドンッ。

「った！ ？っ、ぎいいいいー、い。ふう」

「だ、大丈夫ですか！？」

後走りをしていたフラットはまったく後を確認しなかった。そして中央列の最前列の机の角に左太腿をぶつける。キヤムはそれを回避させようと声をかけようとしていたが間に合わなかった。

太腿を抱えて蹲り、少し呻くとまた立ちあがって何事もなかったかのようにナルニーナと言う人を手招きした。今度は身体を前に向けている。

「だいじょーぶだいじょーぶ！ ほら行こ！」

「あ、はい！」

そうして四人の女子生徒は教室から出て行ってしまった。

つまり。教室に残っているのは、俺と、エジーマと言う人。

二人で無言で見つめ合う。……き、気まずい。

## 19・粘って相棒の魔法の才能は（後書き）

昼食やつと出せたー！

多分この後も四人で食べるんでしょうなー

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 20・気付かずに抱いていた印象は

「名誉騎士アンダーリス公のことは父からよく聞いております。エジーマ・サイクルクリンと申します。気軽にエジーマとお呼びください」

他の生徒が消えて男二人となり無言で見つめ合う気まずい状況が長く続いている中で、先に言葉を発したのはエジーマだった。

「そんな堅い口調じゃなくていい。カイル・アンダーリスだ。俺もカイルでいい。よろしく」

「はい、よろしくお願いいたします」

まずは丁寧に話しかけ、話しかけられた方は「丁寧じゃなくていい」という内容の事をいう。これはこの魔法学園の暗黙の了解である。魔法学園では貴族と庶民である孤児の差別を無くすため、学園内では対等に扱うという規則がある。その中には貴族同士の身分の違いについても書かれており、身分が低かろうと高かろうとお互い対等な立場ではならないと説かれている。

堅い口調でなくてもいいと言ったのに返答が丁寧なところをみると、エジーマは元々そういう口調であるかまだ遠慮しているのか。

「あの、僕たちも食堂に行きませんか？」

「ああ、そうだな」

食堂に昼食を貰いに行き寮に向かっていくときにわかったことといえば、エジーマが誰に対しても敬語を使うと言うことだ。

雑談をしながら歩いていたわけだが、ときたま軽い挨拶をしてくる友達を思われる人たちにわざわざ頭をさげて「こんにちは」と言っていた。……これはいささか丁寧すぎないか？　こんな奴はとても珍しい。

寮の一階にある交流所で昼食を取る。最初はここに来るときと同じように雑談をしながら食事をしていたが、エジーマは突然こう切り出して来た。

「あの、カイルさん明日はどうするんですか？」

「明日？」

「使い魔披露パーティーのことです」

しまった。フラットに説明するのをすっかり忘れていた。

使い魔披露パーティー。それは学園で行われ、第二学年で使い魔を召喚した生徒の父兄によって自分息子娘の使い魔自慢をする気味の悪いものである。

学園で行われると言っても学園側の主催、というわけではなくどこかの貴族の主催だ。庶民が嫌いなのか孤児は出れないという差別がおこなわれているが、学園側が主催してるわけでもないので文句も言えない。

理由はわからないが貴族は全員参加となっているの。ただし家の名前を隠していて偽名を名乗っている人は別だ。俺は隠しているわけでもないので出なければならない。もちろん使い魔も一緒に。

だけどフラットにはまだ伝えてない。というか伝え忘れていた。そういえば女子生徒は孤児を除いてパーティー、という学園にいると味わうことが出来なくなるものに浮足立っているので知っているかもしれないな。

「カイルさんのご両親と、えつとフ、フ」

「フラット」

「フラットさんのご両親は少し気まずくないですか？」

気まずい？ その前に気まずいことを言わせてもらおう。

「フラットは孤児だそうだ」

「あ、そうなんですか？ 僕は失礼なことを……」

エジーマが申し訳なさそうな表情をする。

これでわかったがエジーマは庶民に対してだろうと丁寧だ。すれ違ったエジーマの友人は皆制服を着ているので貴族か庶民か判断す

ることができなかったが、フラットが孤児だと言っても丁寧語なので誰に対しても丁寧なのだろう。

「気まずいって？」

「いや、次期騎士が人を召喚というか……。それに魔法が……」

……わかってる。フラットにもし両親がいたとしてもその人だけじゃない。全貴族を対象に気まずいどころかアンダーリス家の立ち位置が危ない。ただでさえ父親は王族を守れなかったことでこの家は立つ瀬がなくなっているというのに。俺はフラットを使い魔として召喚してしまっている。本当に、こう言うのは申し訳ないが、後ろ盾がない孤児で、馬鹿で、体力がなくて、魔法の才能がない人間を使い魔にしまっている。

「覚悟は、できている」

「そうですか……。フラットさんはどのように考えてるかご存じで？」

「そういえば訊いたことないな」

「今度尋ねてみたらどうでしょうか？」

「そうだな」

今度色々説明した後には尋ねるとして……。明日の事については今日中に説明しなければ。

毎週ある二日間の休日にフラットがどうしているのかはわからないが、もしキヤム達と出かける予定が入ってるのなら非常に申し訳ない。

俺とエジーマ二人が昼食を取り終わり、エジーマの使い魔も食事をたいらげたので会話もここで終わった。

無言で立ち上がり食堂に向かえば男子生徒と女子生徒の合流廊下でフラットをみつけた。左からフラット、キヤム、ナルニーナと言う人、ダシタムという順で歩いているわけだが、フラットはいつものようにキヤムと腕を組んで体重をかけてダラダラ歩いているわけではなく、一人だけ不自然に他の三人から離れていた。

……四人分の盆を持って。

お前は他の三人の下僕かと心の中で突っ込んだが、キヤム達を見て楽しく話しているフラットの横顔を見る限り嫌々やっているわけでもなさそうだ。……腕が重さにプルプル震えているが。

「フラットさん、他の皆さんのを持ってあげるなんて優しい方ですね」

そういう考え方！？

エジーマには声を出して突っ込みそうになった。

……確かにそういう考え方してもおかしくはない。むしろ何故俺はフラットが三人に言われて四人分の盆を持っていると思ったのだろう。

……あれ？　もしかして俺はフラットに対してそういう印象を持っているのか？

## 20・気付かずに抱いていた印象は（後書き）

まあ実際フラットは他の三人に押し付けられてたんです。ナルニナちゃんは遠慮したけど他の二人に言われて押しつけました。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 21・考えてなさそうな相棒は

昼食を食べ終われば授業が待っている。

エジーマと別れて灰組の教室に向かう。途中でロジスと合流した。第二学年からは午前中が魔法、午後が勉学である。午後の最初の授業は歴史であり、真面目にノートを取っていれば寝てる人もいる。……特に相棒とか。

定位置である右列の最後尾にロジスと並んで座っているわけだが向こうの向こうで相棒が授業も聞かずにウトウトしていた。

なんとなく、イライラした。

こいつはっ！ 勉強ぐらい真面目にしないか！ 次期騎士の使い魔として色々、っ！

エジーマとそういうことを話したからだろうか。どうやら自分の心は少し荒れているようだ。大体召喚したのは俺自身であり……、これが俺の実力だったということが証明されただけにすぎないのだ。フラットは普段から授業中は寝ていたりする人だ。別に今日に限った事でもない。国に恩を返す気はあるのかと訊けばあるのだろうけどやる気は感じられない。

今の授業は俺がすでに家で学んだものであり——学園でやる魔法以外のことは大体やったことあるものなのだが——フラットも寝ているし、起こすついでに明日の事を言ってしまうおうか。

「（おい起き）」

ろ、と言おうとするとフラットがハッとしたように顔を上げ背筋をまっすぐ伸ばした。ゆっくりと左右を見て前を見る。教団では先生がいつもの様子で授業をしており、先生に呼ばれて起きたのではないことを理解すると安心したように背筋を曲げた。

隣のキヤムに自分を起こしたかどうか確認するように、身振り手振りを付けて一言二言小声で交わしている。キヤムが否定するように横に頭を振ると、フラットはふーんとでもいうように口を尖らせ

て縦に頭を振った。

机の上に転がされていた鉛筆を持ち黒板に書かれてことをノートに写していくフラット。……ノートを書き始めてしまったなら話しかけるのは申し訳ないし。いや、起きたらノートを写し始めるのは当たり前じゃないか。何故自分はさっき起こして話そうと思ったのか。

変なことを考えて自分に呆れつつ、鉛筆を持ってフラットと同じように黒板を写す。やったことはあるし覚えてもいるが復習するところが悪いわけではない。

とりあえず、授業中にフラットに明日の事を話すのは諦めて授業後にすることにした。

「（今平気か？）」

授業の後、寮に着いたあとにフラットにテレパシーをする。

今日の教室はいつもと違い、初の魔法授業の事もあるが貴族の生徒による明日の話題で持ち切りであった。

クラスの人気者と言えど当事者ではないフラットは話の輪に入れるはずもなく、放課後教室に残って話し続ける生徒を余所にキヤムさっさと教室から出て言ってしまった。モニーも一緒に出て行こうとしたがフラットに止められていた。

話をしていたのは基本的に女子生徒であるが、男子生徒も全く話さないわけではない。俺も話を振られたらきちんと返すが、使い魔が使い魔であるためか全く話しかけられなかった。前に座っていたのは二人の男子生徒だったが、一度こちらを見たあとは気にしているのか話し声が小さくなった。

俺がいるとその二人の男子生徒は話しくいだろうし、フラットやキヤムと同じように孤児院出身であるロジスも話すことがない。ロジスと目を合わせ帰ろう、と合図をして立ち上がる。自分の使い

魔の小人を抱き上げながら頷いて立ち上がると俺の後ろに続いて歩き出した。

廊下に出るとフラットがキャムと腕を組んでのんびりまったり歩いていた。腕はフラットが一方的に組んでいて体重までかけており、その二人の後ろにはキャムの使い魔のルーがいる。

ゆつくりと喋りながら歩く二人の隣をロジスと通り越すと、「ばいばーい」とフラットに脱力した声で言われた。キャムには「じゃあね」と小さな声で言われて思ったのだが、何故同じ孤児院の出であるのにここまで違うんだ。いや、人間だし、と自己完結する。

寮に着いたあとにフラット達がそのまま歩いていたらそろそろ着いてるかという時間を予測してテレパシーをしたわけだ。

中々応答しないので都合が悪いのかなと思い、あとでまたテレパシーで話しかけようとしたところに返事が来た。

「（ごめ、遅くった！ なんぞ？）」

「（明日の事なんだが）」

「（ん？ 明日は貴族の使い魔おひろ……あ。そか、そか、そつか。あー……）」

「（知ってるなら話は早いんだが）」

モニーとも仲がいいし、明日の事は知っているのだろう。ただ自分が行くとは考えていなかったとか。

「（んー……）」

けれどもフラットは何か思い悩んだように唸っている。普通の女子ならばどんな形であれパーティーに出席できるのはうれしいことのはずだよな？ まあフラットがそういうのを好まないのはなんとなく察するが……。

「（あの一、ですねー……）」

「（なんだ？）」

何か嫌な理由でもあるのだろうか？

「（こう、アンダーリスは次期騎士ではないっすか。んで、少なからず期待されてるってかされてたっしょ？ なんだっけ、お父様

が先代の王族守れなくて色々恨まれてるとかそんな感じもあつて？  
それに普段は頭もいいし？　それで結局召喚したのは魔法使いカ  
ッコ生徒カッコ閉じ。けれども馬鹿で体力なくて魔法も使えない。  
風当たり、強い、よね……？」

不安と戸惑いを声に含ませる使い魔に、少し、驚いた。

フラットは色々考えているのだ、と。

「（あ、明日空いてるは空いてるよー？）」

さっきと変わっていつものんびりした口調で話しかけられる。

フラットらしいといえばフラットらしい。何か深く考えているのは  
フラットに似合わないというか。

「（複雑ですまないな）」

「（ううん気にしない気にしない。一応君の使い魔だぜマスターよ  
！）」

テレパシーだと言うのに無駄に明るい声だ。一人部屋の中でフツ  
と口から笑いを洩らす。

「（時間は——）」

「（あ、ごめん、ちょっと用事が！　時間なら他の子に聞くまたは夕  
食のあとでことではーい！）」

午前、と続けようとしたところで一方的に会話を終わらせられて  
しまった。

夕食か……。

六人組での食事。去年はロジスと二人で取っていたりしたが基本  
的には一人だった。大人数で食事を取るのはあまり好きではないが、  
何故だろう。この六人で食事をするのは悪くない。……相棒のおか  
げか？　まさかな、と思いつつ自分のベットに倒れ込んだ。

## 21・考えてなさそうな相棒は（後書き）

フラットは意外と考える子だった。まあそうじゃないと庶民でクラスの中心やってらんない。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 22・意外にあいつの魔法の才能は

意外だった。

ロジスがまったく魔法が使えないなんて、意外だった。むしろおかしかった。

夕食。なんとなくつるむようになり、昨日からの六人で取っていたわけだが、話は今日の魔法の授業が中心となった。ロジスとチェリアとキヤムは孤児院出だから、明日のパーティーには出ない。

パーティーは確かに第二学年の貴族が全員参加ではあるが、偽名を使ってる人は出なくてもいい。モニーは偽名を使っている人であり、家名を掲げて出てしまった偽名を使ってる意味がないので出ない。そう考えるとナルニーナも偽名だし出ないのだろう。

まあ、六人中四人はパーティーには出ない。だから必然的に話題は魔法の事になったわけだが……。

「あー、実はボク魔法が使えなかったんだ」

フラットを除き、みんなが少しは使えたと言っている中でこの発言。

本人は平然と切り出したがこちらは驚きで一杯だ。顔には出さないがな。

無属性クラス以外でも魔法を使えなかった人はいたらしい。だからこの発言がおかしいというわけでもない。

だが。

ロジスの使い魔はスティーなのだ。小人、なのだ。

小人は小さくても人型である。エルフには及ばないが人型である。つまり、ロジスにはそれ相応の魔法の才能があるはずなのだ。

「うっそだー？ ロジー、ぼくを騙そうなんて百年早いよ？」

「いやいやホントなんだって」

チェリアは一度固まったものの、すぐにいつもの不敵な笑みを浮かべてロジスをからかう。それにロジスは困ったように両手を前で

振りながら答えた。

「ふーん。ま、シフターもオレのお仲間ですね！ よろしく！」

いえーい、と二人で声を重ねながらハイタッチをするロジスとフラット。フラットはロジスの発言を聞いたとき、目をいつもより大きく開けて口を尖らせて何か考え事をしていたようだがどうでもよくなかったらしい。いつも通りへらへらした顔で笑っている。魔法使えない仲間が出来てうれしいらしい。

モニーとキヤムは意外だとしか言わなかった。そしてロジスの使い魔、ステイーは無表情だった。

怒っているらしく、ロジスが触れようとすると避ける。謝ってもそっぽを向く。この二人に何かあったらしいが、主人と使い魔の事に他人は口を挟むべきではない。とりあえず放っておいた。

チェリアとモニーの火属性ではマッチを燃やすことから始めたらしい。チェリアは一発で燃やしたらしく、クラスでも相当優秀らしい。モニーは結果を話そうとしなかった。燃やせなかったのだろうか？

ロジス達は自らの指に針を指して、その小さな傷を治すことから始めたらしい。すっかり魔法が出来なかった人は先生に治療してもらったとか。

フラットが無属性のクラスの授業内容を言うと非常に驚かれた。地味だ、と。

そしてモニーはバンダナに特殊な魔法がかけてあることについて非常に驚いた。俺達もそれを今日初めて聞いて驚いたけどな。

「だからバンダナって濡れたり汚れたりしないのですね！ 疑問が解けてよかったですわ」

「え、何それ初耳！」

俺もそれは聞いたことがない。バンダナを付け始めたのは昨日からの事であるし、さっそく汚したモニーにも驚いたのだから。

特殊な魔法の事とモニーの発言を聞いて、ここにいる五人は全員驚いているわけだが、キヤムだけ何かを不審がる様に眉をしかめて

いる。何か不都合があるのだろうか？ まあ置いておこう。

「私、昨日、バンダナを手首に付けたまま手を洗ったのですが、水がバンダナにかかってしましまして……」

「う？ 防水の布？」

「あら、そうですね。防水の布と特殊な魔法の二つがかけられてるのかもしれないわ。汚れを防止する魔法もありえますわね」

私勝手に解釈をしてしまいましたわ、と申し訳なさそうにするモニーを見ながら、特殊な魔法は魔法から防御する役割なのか、または防水などの機能もついているのかと考える。

「よつと」

考える俺の横で——チェリアが自分のバンダナにソースを付けた。啞然。

ソースは野菜の炒め物に使われていたものだがこの際は置いておこう。

バンダナは、汚れなかった。それはいいとして。

こいつは何を考えているんだ……。もし汚れたらどうするともりだったんだ？ いや、洗えばいいのだろうけど……。

「んー？ この結果じゃよーわからんけど、とりまバンダナにや何しても無駄ってことかな？」

地方の国民の訛を少し交えて言うフラット。

フラット孤児院が地方にあったのかもしれないが、キャムには訛がない。何故フラットだけに訛が？ 今度聞いてみるか。

「そうですね」

「じゃあボクも」

そう言いながら自分のバンダナに水をかけようとするロジスに「馬鹿なことするな」と叱って止めつつ、騒がしく夕食の時間は過ぎていく。

夕食を取り終わり、食堂から出たフラット、キャム、モニーが右

に曲がる。寮に帰るならまっすぐでいいはずだが……一体どこへ？  
「これから図書室いってくらー（その本読み始めたら呼ぶから説明  
よろろん！）」

「いつてらっしゃーい！ また明日！」

喋りながら俺にテレパシーを飛ばすという荒業をやったのけたフラット。実際にやってみればわかるがテレパシーと言ってることが混ざって変になることが多い。フラットはこういうのは得意らしいが……。才能の無駄遣い……？

男子寮へと帰る俺達三人の後ろにはルギーとステイーがいる。ステイーは相変わらず無表情で、軽くロジスの後ろ姿を睨んでいる気がしないでもない。ルギーはそんなステイーに抱きしめられており、「ウュー？」と鳴いてステイーのことを気にかけている。……ルギーって鳴くのか。

「何があつたんだ？」

「色々、ね」

意味深そうなものを言葉に含ませるロジスに「へえ」と言っておく。これ以上詮索されるのはよしてほしいのだろうし。

フラットにはどう説明しようかと考えつつ、三人で雑談をしながら寮に帰った。

## 22・意外にあいつの魔法の才能は（後書き）

フラットが真つ先にバンダナを汚してみようとするものですがね  
スティーは不貞腐れてます。

感想、評価、アドバイスなど頂けたら幸いです。

## 23・闇夜の少女の決意は（前書き）

閑話でもよかったですけどとりあえず  
短めです。

## 23・闇夜の少女の決意は

静かな夜だった。

月は満月にほど近く、明日には満月になるのではないだろうか。空には星がサンサンと輝き、民家を優しく照らしていた。

子供は寝静まり、大人はチラホラ起きているぐらいの時間。

とある路地に、二人の人間がいた。

「今日、アヤツが見つかったの」

「それは信じて良い情報なの？」

いくら星と月が民を照らしていようと、路地裏にいる彼らをしっかりと捉えることはできない。

一人は如何にも怪しい恰好をしている。フード付きの服を着ており、フード自体は顔を隠していないが、暗闇とフードの影がその人の顔を認識させなかった。

服は如何にもおとぎ話に出てきそうな悪い魔女という感じである。声は老婆と老爺が混ざった声で、性別を確認することはできない。フードの隙間から見える長い髪は白ではなく黒。いや、藍。暗闇だから藍に見えるのだろっから、本当は青なのだろっか。染めていないのなら色素欠乏症なのかもしれない。

無色透明のメガネをかけており、それは時折月の光を受けて光っていた。

「一瞬だけ魔法を使いおった。そのあとは反応しなくなったがの」  
「でも……」

もう一人は若い女であった。傍から見れば少し派手目な庶民の小娘である。その女は街頭に近い所に立っているため、もう一人よりは容姿がよくわかる。

少し季節はずれな袖無し服を着ており、丸見えの肩には頭の左右で束ねられてパーマをかけた色素の薄い髪の毛が垂らされている。

「反応はあの魔法学園からじゃ」

「なんですって……」

「アヤツの年齢を考えれば丁度であろう。聞いたところによると、あの学園は第二学年から魔法の授業をするそうじゃ」

「じゃあ」

「そう。魔法の使い方がわからんて、一度漏らしてしまったのだから。それをわしが察知した」

「……信じるに値するわね。後は任せて」

「頼んだぞ。ああ、明日は貴族がパーティーをするらしい」

「絶好のチャンスね」

二人が会話をしたあと、若い娘は何事もなかったように道路に出てどこかへ歩いていった。

もう一人はしばらくそこに立っていたが、一度空を見上げるとゆっくり歩いて暗闇へと消えていった。

若い娘が歩いていった先にあつたのは一つの噴水。建物が取り囲むように作られた広場の真ん中にある噴水の周りにはたくさんの人が集まっていた。

注目されているのは二人の人間。

一人はしっかりと響く声を震わせて歌っている男。

さきほど喋っていた人のようにフードを被ってはいるがまったく怪しくない。顔を隠しているのである。

身元がバレてはいけない貴族の坊ちゃまだという噂があるが、誰も真実は知らない。

もう一人はなんとなく怪しかった

黒いズボンに黒いパーカー。街中を歩いていたら不審者として扱われそうな服装であるが、男の後ろで楽器を弾いているので見咎められることはない

髪の毛は庶民の男児と女児がするお河童のような長さであり、身

長は約百七十もあるであろう人だが、歌っているわけでもないの  
で女が男かはわからない。

しかも両耳あたりの髪の毛はピンで留められていて、異常に長く  
胸まで付きそうである。

風が吹いて髪が揺れる。

ツ――

男は歌い終える。

周りの人からは拍手があがり、男に向かって金を投げる人も少な  
くはない。

若い娘もその中の一人である。彼女は純粋にこの男のファンだっ  
た。男の歌の虜であった。

男を囲む人たちがまばらにどこかへ散っていくと二人も片づけを  
始める。金を拾い集めて楽器を片づけたあと、そこを発とうとする  
が若い娘は声をかけた。

「あ、あの、ファンです！ これからも頑張ってください！」

彼女はいつもなら声をかけない。だが今日は声をかけた。何かを、  
覚悟したように。

「ありがとうございます」

男はそれに気付かず返事をする。いたって普通な受け答え。

しかし、その言葉は彼女の心の奥深くまで染み込んだ。

二人はどこかへ去って行った。噂では学園の近くに住んでいるら  
しいが、真実を付き止めた人はいない。ストーキングをした悪質な  
ファンもいたらしいが撒かれてしまったらしい。

若い娘は誰もいなくなった噴水の周りで目を閉じた。

そして、呟く。

「これから、も」

嬉しそうにほほ笑んで、目を開く。

その瞳は喜びや悲しみや懐かしさが混ざったような、複雑なもの  
である。息を大きく吸って、吐く。

そうしてまた前を見つめた彼女の瞳はただならぬ決意が溢れてい

た。

「わたしは、やる。」

そう呟いて大きな一歩を踏み出す。もうこれまでとは違うんだ、  
とでも言うように。

## 24・銃声と窓ガラスの割れる音は

パーティー開催日。

学園に雇われている使用人は慌ただしく敷地内を動きまわり、下準備やら何やら色々なことをしている。全ては正午から夕方にかけて行われるパーティーのためだ。

パーティーは夜に行うのが普通だ。学園側主催のパーティーも例に洩れず普段は夜に行っている。

貴族主催のパーティーに孤児院出の生徒が出れないのは些か不平等ではないか。しかしパーティールームは貸せない、と強気に出ることもできない学園側は仕方なく、夜ではなく正午から夕方にかけて行うことを条件に部屋を貸し出すことにしたのだ。

普段は、とは、学園で何かをした際に行われるパーティーである。これに関しては第二学年以上ならば自由参加である。第一学年が参加できないのは、まだ酒を飲むには適していないと法律で決められているからだ。

貴族のパーティーに貸し出されたパーティー専用の部屋、パーティールームは、寮からだと言食堂とは反対側にある。寮の出入口はパーティールーム側にあり、あまり使われることはないが今日は第二学年の貴族の女子生徒や男子生徒が自らを着飾って意気揚々と出て行くのが見受けられる。

見受けられる、というのは、俺が現在進行形で寮の出入口に突っ立っているからである。

ドレスを着た女子生徒や男子生徒やらが俺を不審に思っただけとこちらを見ては、どうでもいいかという風に素通りしていく。そのことに居心地の悪さを感じながらも俺はそこでフラットを待っていた。

「（あのー……）」

待ち合わせにはまだ時間があると言うのに、フラットからは戸惑

っているような、申し訳なさそうなテレパシーが送られてきた。

「（どうした？）」

昨日の夜、色々説明はしたから大した問題はないはず。何か不都合でもあったのだろうか。

「（ドレスって、持参なわけっすか？）」

嫌味を言ってくれる貴族には反論するな、礼儀作法はわからなくていいから走ったりするなと色々言った。確かにパーティーに関することは言った。

しまった。

貴族ならばパーティー用に、ドレスを学園に持ってきているのだ。学園主催のパーティーではドレスの貸し出しもするから、偽名を使ってる貴族などはそれを使うことも多い。

それを大前提に話を進めてしまった。

フラットがドレスに関して質問しなかったのは学園側が貸してくれるのだと思ったのだろうか。ドレスを着るのかどうかと質問してきたときは顔を嫌そうにしていたから、着ること自体は好きではないのだろうと思ひ話題にしようとも思わなかったのだが。

フラットはドレスを持っていないのだ。

そのことをすっかり失念していた。

どうするか、頭が混乱している。解決策をひねり出そうとして頭を一生懸命働かせていると。

パンッパリンッ——

銃声。パーティーが始まる前の部屋からではなく、寮から。男子寮から聞こえてくる銃声。

今日にかかわらず、普段の日々であったとしても、学園に似つかわしくない物騒なその音。それに覆いかぶさるように鳴った窓ガラスの割れる音。

次期騎士である俺は主に剣を使うが、銃は使えないこともない。だからこれは銃声であることがわかる。

その場を離れ男子寮の階段を上る。

「（窓割ったんかな？ 今の音。この階の男子寮からかな？）」

「（銃声だ！ すぐに逃げろ！）」

フラットが本意に発した情報で、第二学年の部屋から聞こえた音であることを知り素早く階段を駆け上がる。

『男子寮にて何者かが攻撃をしたようだ。生徒は出入口の方からすぐに外に避難すること。パーティーは中止です！ 貴族の皆様は今すぐお帰り下さい！ 繰り返します——』

三階に着くと、丁度向こう側の階段をフードを被った人間が降りていった。拡声魔法による放送により部屋の中に残っていた生徒が次々と出てくる。

次々と開けられるドア。しかしそれより前に開けっぱなしになっていた部屋がある。おそらく先程フードの人間はその生徒を奇襲して、生徒を追いかけて行ったのだろう。

あの場所は…… ロジスとチェリアの部屋だ！

俺は生徒であるし、ここまで来たが放送に従って外に避難してもよかった。

しかし、襲われたのが友達であるなら。

生徒たちが走る方向とは反対側に走りだす。それを見て何か声をかけて来ようとする人はいるがとがめる人はいない。

「（男子寮のロビー！ 怪しい奴おる！）」

この寮は一階分に一学年の生徒がいるので廊下は果てしなく長い。あちら側に着くまでの間にさきほどの人間の位置を見失う可能性は十分にあるのだが、行動しなくては始まらない。

そう考えながら走っているとフラットのテレパシーが来た。

こ、こいつ……！ さっき逃げろって言ったのは聞こえなかったのか！

「（お前じゃ危ない！ 今すぐ逃げろ！）」

「（うつさいそれぐらい自分でもわかるわ！ ていうかお前の使い魔だったの！ 情報あげてるんだし役に立つだろ！ 自分の身は自分で守るし安心せい！）」

ぐっ！ 反論に詰まる。

確かにフラットは俺の使い魔だし……クソ！

何メートルもある長い廊下を走り終えて一階まで降りる。

ロビーの入り口に入ろうとした途端、中からロジスとチェリアが走り出してきた。それと同時に入口の天井が爆発。

瓦礫が入口を塞ぐ。

「カイル！」

「お前達大丈夫か！？ ケガは！？ フラットを見てないか！？」

「フラットはロビーの中！」

外傷はなさそうなチェリアが肩で息をしながら答える。

なんだと？ あいつは突っ込んでいったのか！？

「敵を引きつけてくれて……ゲホッ」

「（おい、大丈夫か！）」

唾が気管にでも入って咳き込んだロジスの背中をチェリアが擦るのを横目で見ながら、フラットにテレパシーを送る。

敵が魔法を使ったところを見るとどうやら魔法使いのようだし、銃も持っている。

「（大丈夫じゃない！ そっち行っただ！）」  
爆発。

先程の瓦礫が爆発し、破片がこちらに吹っ飛んでくる。

「うぐっ」「わっ」「わあ！」

中からフードを被った人物が煙に紛れて飛び出してくる。

そして——消えた。

## 24・銃声と窓ガラスの割れる音は（後書き）

戦闘シーンではないけれど戦闘シーンっぽい今回の話  
わかりにくくてすいませんでした

## 25・三人で受ける事情聴取は

騒ぎ立てるだけ騒ぎたててあっさり消えてしまった先程の襲撃者のことを考えながら、俺達は治療を受けていた。

ロジスとチェリアを襲撃し、男子寮のロビーの入り口を破壊して消えたあの人物。

それによってパーティーは中止になったし貴族達も帰ってしまった。学園側には危機管理だとか何とか苦情が来そうなものだ。まあそれは学園側が何とかしてくれるだろう。

俺とロジスとチェリア、あとさっきは見えてなかったけどルギーとステイーも爆発の影響で怪我をしている。特にステイーは気を失っていて顔が青白く、主人であるロジスはそれを見てさらに青白くなっている。

フラットは怪我をしなかったそうで、俺達より先に先生たちから事情聴取を受けている。俺達も治療が終わったら受けるらしい。

入口以外は何事もなかったかのようにキレイなままのロビーで身振り手振りで説明しているフラット。それを先生が聞いてメモしている。先生が何かをフラットに言うと、フラットが先生に深くお辞儀をしてこちらに走ってきた。

「みんなだいじよぶ？」

「う、うん、まあ平気だよ。チェリアもな」

「アンダーリスは？」

「ん？ ああ俺も大丈夫だ」

床に座って治療を受けてる俺達を、しゃがんで覗きこむように尋ねてくるフラット。バランスを崩して前に倒れたためにスカートの中が見えて——庶民服の短いズボンをはいていた。いや、別にがっかりしているわけじゃないぞ？俺は一体誰に言い訳してるんだ。俺自身か。

今のフラットの服装は学校の制服だ。おそらくドレスは持ってな

いから一応何かを着ようと思い、迷った拳句制服に辿りついたのだろつ。

さきほどからチェリアは無言を貫いている。ずっと俯いており、その肩を後ろからをロジスが抱きかかえている。怪我をしたからではなく精神面の問題だろつ。治療されながら時折ロジスがチェリアに「悪い。ほんつと悪い。後で話すから、な？」と、青白い顔のまま子供をあやすように言っているのからして、ロジスと喧嘩した可能性がある。ロジスも気まずそうにしていたしな。

「うんわー相棒その高<sup>たっか</sup>そうな服ボロボロやん……」

こちらを見ながらところどころ破れた服を見て、フラットが声を漏らす。

「んじゃ、キヤムとかも気になるし、ばっばーい」

そう言つて、俺達を治療している先生に言うのと走つて行つた。

今ここは関係者以外立ち入り禁止となっている。だからここには先生と俺達四人、使い魔二匹しかおらず、キヤムもいない。

キヤム達は避難してるから無事なのだろうけど、一応心配なのだろうな。

「治療が終わつたから、さっきの事を教えてほしいんだけど……、大丈夫？ 体調が芳しくないようなら後日でも……」

「大丈夫、です」

前半は俺達三人、後半はチェリア一人にのみ向けられた言葉。

それは治療してくれた先生によるものだ。この先生のおかげで目立つた外傷はなくなつたし、流石教師をやっているだけあるな。使い魔が見えないのだけでも。

消え入るような細かい声で返事をするチェリアにいつもの好戦的な雰囲気は窺えない。……本当に大丈夫だろうか？

大丈夫だとは思わない返答に困つたようにしていた先生だったが、何か考えるようにして視線を上に向け、手を丸めて顎に当てると、まあいいかともいうようにこちらに視線を戻した。

「えーつと、まず、お名前と学年は？」

「みんな二年で、ボクはロジス・シフターです」

ほら、とロジスがチェリアを促す。

「チェリア、シフター、です」

「カイル・アンダーリスです」

チェリアの名前は普通にチェリアだったのか、と感心しながら名前を名乗ると先生が一度目を見張った。すぐに何事もなかったように戻ったけどなんだかな……。

「じゃあ、何があったのか教えてくれる？」

「あ、はい。いつものように部屋で過ごしてたら急にさっきの人間が入ってきて。それで銃を」

「そのときその人は何か言ってた？」

「いえ、何も」

事情聴取をロジスに任せていたチェリアがロジスの服を引っ張る。ふんふん、と頷きながら手元の紙に色々書きこんでいた先生がそれに気付いてチェリアに問いかけた。

「何か違う？」

「あ、いえ、ロジーの言った通りです」

再び俯いてしまったチェリア。本当に大丈夫か？

「続けて」

「はい。それで逃げて逃げて、男子寮のロビーに」

「あそこは出入口が一つしかないよね？　なのになんで入ったのかな？」

「気が動転してて……」

事情聴取は誘導尋問のようだ。ロジスの言葉に段々覇気がなくなっているような……。

「続けて」

「それで、追い詰められて、フラットさんが飛び込んできて、身振り手振りで逃げろって。それにあの人が気を取られてるすきに外に飛び出しました」

「そしたら出入口が爆破されました」

たじたじになったロジスのかわりにつきをいう。そうすると先生の視線は自然に俺に向けられた。

「それで、君はどうしてそこにいたのかな？ 避難しろって言われたはずだよな？」

「……二人が心配で」

先生の言う通りなので何も言い返すことが出来ない。顔を正面から見ないで答えた。

「まあそれは置いておくでしょうか。続けて」

「その後数秒は何も起こらなくて、また瓦礫が爆破されて、あの不審人物が飛び出してきて消えました」

「消えた、っていうのは？」

「まるで魔法でも使ったかのように……」

でも、それは無属性の魔法のはずだ。先程の人間は二回も爆破をしているから火属性のはずなのに。……いや、他に仲間がいてその人が爆破、先程の人間が、か？ でもその逆だとしても仲間って……。

先生も同じことを考えているらしく、手元の紙を睨んだまま唸っている。

「……今日はこれぐらいにしましょ。また事情を聞くことがあるだろうから、覚悟しておくように。じゃ」

「あ、事情聴取終わりましたか？」

「え、ええ」

この場を離れようとしていた先生に声をかけたのはチーカス先生だ。なんだろうか。

「カイル、お前の親父さんが話したいことがあるそうだな。応接室で待たせてる。ついてこい」

……父上が？ 何故、と訊く暇も与えられず、先に行ってしまった先生の後を慌てた追いかける。

父上はこの騒ぎで帰らなかったのか。でも……父上は、何の用だろうか？

## 26・よくわからない用件は

応接室。

それは、学園長室の隣にある部屋である。

学園長室にも客人用のソファなどがあるが、それは学園長への客の場合に通されるのであり、生徒への客の場合は応接室が利用されることが多い。

道はわかっているものの、先生に連れられて応接室まで行けば、扉の前にはフラットが立っていた。あからさまに驚くということはなかったが、眉を顰めて不思議がる俺にチエーカス先生が説明してくれた。

父上は俺とフラットに話があるらしい。

確かに手紙にはフラットの事を書いたし、気になったのかもしれないが何故こんなときに呼び出すのだろうか。

不審者はロジスとチェリアを狙う、という不可解なことをしたが、だからといって学園に来た貴族がまた狙われないとは言えないものの。まあ父上なら強いし不審者を打ちのめすこともできるかもしれないが。

片手でバンダナを巻こうと頑張りながらこちらに軽く手を振ったフラット。そういえばさっきバンダナを巻いてなかったような……？「相棒のお父様だって？ なんの話かね？」

「俺にもわからない。入るぞ」

応接室の扉を控えめに叩く。先生はそれを確認すると踵を返して歩いて行った。

フラットは急いでバンダナを巻こうとしている。急いたせいで上手く巻けず、バンダナをスカートのポケットにしまった。

「どうぞ」

中から父親の入室許可が出る。フラットをチラッと見れば緊張してるようだった。

「（緊張しないでいい。父上は優しい方だ）」

「（それでも緊張するわい!）」

実際、声からは、名誉騎士であることを感じさせない、とても温和な性格が出ているし。

扉を開けて中に入れば後ろからフラットがついてくる。オドオドしながら下を向いて歩き、扉が自分の重さで閉まる音にビクツとしていた。

「父上、お久しぶりです」

「堅くなくて良いんだ。そこに掛けてごらん」

柔らかい笑顔から発される言葉には年よりも老いた感じがする。

父上の座っている一人掛けのソファアの、向かい側にある、扉側の三人掛けのソファアに左から座る。それを見てフラットもいそいそと右から回って座った。

父上は、足を閉じ、膝に手を当てて下を向いてるフラットを優しくな目つきで見る。

笑っていた顔を、より一層崩して朗らかに笑うと俺とフラットを交互に見て口を開いた。

「カイルの父の、ボーデン・アンダーリスだよ。よろしくな」

「え、あ、よ、よろ、う、よろしくお願いします! え、えと、あい、あん、あ、か、カイル、君の使い魔のフラット・ブルースカイです!」

「ははっ楽しい子だねえ」

緊張しすぎだろうと言いたくなるほど噛みまくりな台詞に、父上が口元をゆるめる。

フラットは何を考えたのか俺をカイル君と呼んだ。……いや、何を考えたのかは大体わかる。アンダーリスと呼ぶわけにもいかなしいし、相棒というのも変だ。それで迷った拳句カイル君と呼んだのだろう。しかも最初は呼び捨てにしようとしたが、目上の人だからだとか考えて君を付けたのだろう。

カイル君と呼ばれた俺は非常にむず痒い。

よくよく考えてみれば、俺はフラットに名前で呼ばれたことがないのだ。

楽しい子だと言われて照れてるのか恥ずかしがってるのかわからないフラットを見ながら、父上に質問することにする。

「父上、本日はどのような用件で……」

「ああ、すまない。その、な」

……もしかして、俺の使い魔を見るために来た、などというわけではあるまい。

再び俺とフラットを交互に見る父上。一度ゆっくりと目を閉じると、息を軽く吸ってこう言った。

「フラットちゃんを、しっかりな」

……父親の考えていることがわからない。  
しっかり、とはどういうことだ。

フラットの方を見れば、フラットも同じようにわからないという顔はしていなかったが、困ったように笑っていた。

「いえいえ、そこは『カイルを、しっかりな』ではないでしょうか。私がカイル君の使い魔なわけですし」

「はっは、そうだったね。すまない、この年になると頭がボケてな」  
二人で打ち解けたように笑う中、一人だけおいてけぼりにされる気がしなくもないのだが。

フラットは父上の言おうとしたことをしっかりとわかったようだ。  
父上の用件とは今のことだったのだろうか？ ……まさかな。

「フラットちゃんと話したいことがあってね。カイル、席を外してくれないか」

「はい、わかりました」

そうか、父上はフラットと話したいのか。

だが……何を話すのだろうか？ 父上に一度お時儀をして部屋の外へ出る。

扉が閉まる前にフラットを見れば、助けてくれとでもいうように焦った顔になっていた。

廊下でこのまま帰るかここで待つてるか考えたが、あの状態のフラットを置いて帰るわけにもいかないと思い、待つ頃にする。

あの柔和な父上の事だ。「息子をよくしく」とか……いやいやまるで婚礼の言葉じゃないか！ 断じてそういうことを考えたわけじゃない！……俺は誰に言い訳してるんだ。

はあ、と小さくため息をついて壁によりかかる。

先程の、真意がつかめない言葉のことだろうか。だが、「フラットちゃんを、しっかりな」と言っただけだし、俺が呼びとめられそうなことだというのに。

応接室の扉が控えめに開けられた。

出てきたのはフラット。

扉が閉まる前に中の人、つまりは父上に一度礼をすると、こちらの姿を捉えて近寄ってきた。

「父上はなんと？」

「ん？ いやあ、相棒の学校での様子？ みたいなの？」

……なんだって。

なんとくだらない用件なんだ。心の中でさっきより大きなため息をつく。

「あ、ねえ、そっぴやロジスとチェリア、なんで狙われたん？」

「いや、わからない」

ポケットから灰色のバンダナを取り出し、片手で手首にバンダナを巻こうとしながら問いかけてくるフラットを見ながら答える。

「え、理由ねえのかよ」

「襲撃者は何も言わなかったらしい」

「ふーん」

フラットが、興味が失せたとしても言うように素っ気なく返答すると会話が途切れてしまう。ちなみにフラットはまだバンダナが巻けてない。

ふんっ、と意気込んで手首を捻ったりして頑張っている。迷った拳句、

「て――」

「よしっ」

つだおうか、と言おうとしたんだが……。

フラットの手首にはしっかりと灰色のバンダナが巻かれていた。  
取り越し苦労だったか。

## 27 少年の失踪は

少女は、考える。

自分にも、秘密はある。大切で、大事で、大好きな幼馴染にも明かすことのできない、秘密。生まれた時から抱えている秘密。

自分がそれを言わないのは、幼馴染と同じ理由だったからだ。

怒る資格は、ない。秘密を教えて、今までと違う関係になってしまったら、怖い。

でも、言って欲しかった。頼って欲しかった。信じて、欲しかった。

コンッ。

部屋のドアが控えめに叩かれたのは、俺が起きたばかりのときだった。

時計を見ればまだ七時。休日に人の部屋を訪ねるには早い時間だ。なんだ？　と思いながら開けてみれば、そこには庶民服を着て俯いたチェリアが立っていた。

「ロジスは？　一人か？　……気分が悪いのか？」

チェリアの様子がいつもと違う。足を揃えて立ち、手は後ろに組んでいる。

ドアを開けたときにチェリアがいる場合、何か攻撃を仕掛けてくるし、チェリア一人で俺の部屋を訪ねることはない。いつもロジスが近くにいるのだ。

俺が知る限り、元気じゃないチェリアなんてみたことないし、俯いて何も言わないチェリアも見たことなかった。

「……が。……い」

小さい、覇気のない声で喋るチェリアも見ることがない。

「なんだ？ よく聞き取れない。体調が悪いのか？」

一体どうしたと言うのだ。それにロジスはどうした。こんなチェリアを放ってあいつはどこにいるんだ？

ロジスはチェリアをとて大事にしている、はずだ。

「ロジスが、いない」

チェリアが声を上ずらせて、今にも泣きそうな声で言った。

……どういう、ことだ？ 驚いてる場合ではない。

「何かあったのか？」

先に食堂に行った、なんてことではないだろう。チェリアがこんなになるくらいだから、何かあったとしか考えられない。

「起きたら、こんなのが」

顔を上げてこちらを見て、後ろから手を回して目の前に出されたのは封筒。

ピツタリと閉じられた封を開けて、中から紙を取り出す。

『お前のルームメイトは私達が預かった。返す予定はない』

……なん、だって？ つまり、

「誘拐されたのか……？」

「そう、みたい」

学園側は一体何をしてるんだ。

昨日の襲撃者が来てから、学園は門の警備を強化した。昨日はパーティーだったから、警備を緩くしていたらしい。大体学園側は狙われる理由などないのだ。

門には先生を配置して徹夜で警備させていたはずだ。

ロジスが誘拐されたのさえ気付かないなんて、なんて使えない学園なんだ！ ロジスは誰に誘拐されたのだろうか。昨日も狙われたし……あの襲撃者か？

そんなことを考えるより、先にやらないといけないことがあるな。

「それ、先生には言ったか？」

「……まだ」

「学園長に言いに行こう」

「う、ん」

妙に齒切れの悪いチェリアの背中を叩いて歩くよう促す。こんなに沈んでるチェリアを走らせるのも悪かったので、チェリアの歩く速さに合わせて歩く。

「ステイーは？」

「え？ いなかった」

……使い魔も一緒に誘拐？ 変な話だ。ああ、ロジスは橙だったか。じゃあそこまでおかしくない、か。

火属性などである場合、使い魔に抵抗されたら余計に大変なだけだ。でも、いくら治療系の使い魔だからって誘拐したら大変なのだろうに。

まあ相手にも理由があるのだろう。考えるのはあとでいいか。

朝早く学園長室を訪ねることには気がひける。

けれども、老人の朝は早いだろうし、そもそも生徒が誘拐されたと言う緊急事態だ。別にいいだろう、と自分を納得させた。

内側から「入りたまえ」と許可を貰って入り、チェリアを促せて理由を話せば、学園長は目を閉じて何かを考え始めた。

「学園側が全力で探そう。じゃが他の生徒の混乱は招きたくないから。明日以降は体調不良で欠席とする」

学園長が出した結論はこうだった。……大した不満はない。

隣に立つチェリアを見ても、ずっと俯いたままだから表情がわからない。

「今日はゆっくり休むのじゃ。君は気が動転してるのかのう？ 明日からはしっかりと勉強に励むように。明日になっても落ち着かないようなら、無理せず部屋で休むといい」

「……はい」

ゆっくりと頭を縦に振りながら、覇気のない声で返事をするチェ

リア。……明日は休んだ方がいいな。

「失礼しました」

俺が何もしなかったら、永遠と学園長室に無言で立ってそうなチエリアを促して退室させる。

「か——」

「一人で、帰るよ」

えるか、と言おうとして遮られる。……昨日はフラットとこういうことがあったなと思いつつ、ここはチエリアの意思を尊重することにする。

だが、その前に。

「ロジスが誘拐された理由に、心当たりはあるか？」

「ないよ」

間髪いれずに返された答え。それを言った本人は未だに俯いたままだが。

「そうか。疑って悪かったな」

食堂に行くか、と考えながらチエリアの先に行く。チエリアはトボトボ歩いていて大丈夫だとは思えないが、本人が一人で帰ると言っているのだ。

気持ちの整理もしたいだろうし、俺が無暗に関わるのはやめておこう。

休日の朝食はいつもの面子では取らない。起きる時間がバラバラだから別々に取ろう、という意見にみんな賛成したからだ。

一人で朝食を食べながら、ふと何かに違和感を覚えた。

自分でもその「何か」がわからない。けれどもその何かが引っ掛かる。

そんな違和感は、朝食を取り終えた頃には消えていた。

## 27 少年の失踪は（後書き）

違和感、何かわかりますでしょうか。

## 28・一族で尻尾を振るのは

「うわっ痣が青ってるー。マジないわー……」

いつものように、休日は昼過ぎまで寝るルームメイトがそうだった。「惰眠をむさぼっているのですよふっふっふー」と言っただけで起きないわけだけれど、今日はそれでもいいかなって。

昨日は、とても疲れたはずだから。

怪我ひとつなかったけれども、少なくとも精神的には疲れたと思うし。

布団がもそつと動いて、あつそろそろ起きるのかな、と時計を見ながら考えていたら、髪の毛をばさばさにして起き上がったブルー。あたし達の部屋にある二段ベットは、下の段の天井が低く、その分上の段の位置も低い所にある。まあ、かと言って、落ちたら痛くないわけではないんだけどね。

机に座っているあたしからすると、ちょっと上の段は見にくいけど、見えないわけではない。

平日のように無理矢理起したわけじゃないから、機嫌は悪くないはずなんだけど、何故か眉をしかめていた。

眉間にしわを寄せたまま、乱暴に自分の布団を剥ぐと、ズボンの裾を太ももまで上げる。

青とも緑ともいえない色となっている、自分の膝に出来ていた痣を一度押し、その後も数回押し、口から先程の台詞が出たのである。

「ブルーだけに？」

「あ、そうだねー。……いやいやブルースカイですし。緑い感じの青ちゃいますし」

ちなみに痣を押すたびに少し痛がっていた。

「いーまなーんじー？」

それに答えようとするも、今この場所から時計は見えない。少な

くとも十一時は回ってるはずだよなと思いつつ、立ち上がって見に行こうとすれば、膝に乗っていた使い魔が素早く時計を見に行ってくれた。

「十二時二十六分です！」

「ありがと、ルー」

雑用みたいなことでわざわざありがとうね、ルー。

「何時て？」

「十二時二十六分て」

ブルーにはルーが鳴いたようにしか聞こえなかったから、通訳する。その傍ら、両手で抱き締めるようにしてルーを撫でる。

「じゃーお昼行こかー」

「そうだねー」

間延びした同意を誘う言葉に、こちらと同じく間延びした声で返事をする。たまにこうやってうつつちゃうんだよねー……。

「そういやーね。犬って、うれしいから尻尾を振るんじゃないんだってー。原因はわかってないらしいんだけどねー」

色々と言語が修飾された発言。慣れてないと解読が難しいと評判のブルーの発言。本人は「頭の中ごっちゃになってるんよなー……」と自覚してるからいいんだけど、この癖は治せないらしい。寝起きとか、そういうのを抜きにしてダメみたい。

二段ベットに備え付けられた梯子を降りつつ、こちら、おそらくルーを見ながら言った。

へえ、そうなんだ。ルーは今尻尾振ってるからね。それで急に言っただのかな？

「でもブルー、この前は、えっと……、『うれしいか犬ところ』みたいな感じのこと言ってたけど？」

「いやいやその後に本読んだのー。あ、でも普通の犬のことだから、使い魔になると違うんじゃない？ 知らね」

ブルーは夜中の寝返りよってボサボサになった髪を梳きながら、最後は会話を放棄した。いや、放棄したわけじゃないんだけど、よ



空気を壊してくれたブルーにはありがとうの代わりに受け流しを試みた。まあ言わなくてもいいよね、って思ったから。

あたしが返事をしないと、ブルーはそのまま黙ってしまふ。まあこれもいつもの事だから、ブルーも対して気にしない。

ほら、後ろを振り返ってもいつものダルそうな顔。ちょっと半目かも。

廊下を歩きつつ、ブルーは髪の毛を結ぶ。

足元にはルー。尻尾はそのある気に合わせてユラユラと揺れている。

そっか……。普通の使い魔の犬は尻尾、振らないんだ。でも、別に戦争とかあつて戦ってるわけじゃないし、別に気にしなくてもいいよね。

それより気になったのが、一族とかなんとか。

一族とかつて、何か力があるイメージ。本を読み過ぎっていう影響もあるのかもしれないけど、実は秘伝の術が、とか、こういう特性が、とかそういうイメージがある。

だから、一族の中では無能でも、犬の使い魔の中では結構良かったりするんじゃないかな？　って思ったり。

そんな考え事を延々として、気がつけば食堂。しかも中に入ってる。

「あ、あつちにナルニナいるー。行こ！」

「あ、うん」

ちよつと考えに集中しすぎてたんじゃない？　とか、え、こんなに考えると実はシヨク受けてるのかな、まさか。とか思いつつ、とりあえずブルーの背中を追いかけることにした。

## 28・一族で尻尾を振るのは(後書き)

長らく更新せず申し訳ございませんでした！

## 29・前歯のあるネズミは

「とうっ！」

一人ポツンと座っていたナルニーナに掛け声とともに飛び付いたブルー。

その途端。ナルニーナの体が、ガクツつと下がった。

「おうえ！？ ご、ごめん！」

料理の乗った皿に顔面から衝突する手前、ナルニーナ自身が腕で支えてその事態を防ぐ。あと一步で顔面がトマト真っ赤になっていたであろうナルニーナの顔は驚きで一杯だった。

腕で支えた際に大きな音がしたのか、周りの人はちらほらとこちらを見ている。本人たちはそれに気付かずただ驚いてるだけだけど、あたしは委縮しちゃいます。

ブルーはというと、驚かすつもりだっただけで、体重をかけて体がガクツと行くとは思わなかったために、困惑しながら謝ざるをえない。まあそれもそのはず。

ブルーはいつも誰か、特にあたしに抱きついたりしてる。けれど、みんな驚いて竦んだりすることはあれど、急に体が折れることはない。人間には反射神経というものがあり、もし体重をかけて抱きつかれたらそれに反発する力が自然と発生するはずなのだ。多分。

「え、うえ……？ え、あ、そっか……。ううん、大丈夫、です」

自分でも何が起きたかわからない様子のナルニーナ。驚きすぎて腰が抜けたのかもしれないけど、それは別としても、何が起きたくらいかはわからないかな？ ……あ、あたしがブルーの抱きつきに慣れ過ぎてるだけ、かな？

目をキョロキョロと動かしてブルーを見ると、納得したようにうなずいた。

「ごめん、ほんつとご、うたっ！ いやそんな痛くなかった！」

気の動転している加害者、ブルーはもう一度深々と頭を下げ、手

を添えて謝る。そしたらジェリー指の先に噛まれた。

「こ、こら、やめなさい！」

「いやーいいんよ。う、い、いやだからってそんな強く噛みなさんなジェリーさんん、た。マスターのこと驚かしちゃったもんなあ」  
ブルーに止められて、一度はジェリーを引きはがすのをやめたナルニーナだったけど、ジェリーがより一層強くブルーの事を噛み始めたのを見ると慌てて引き剥がした。

「ご、ごめんなさい、うちのジェリーが……」

「うんにゃ、ほら、甘噛みやで」

「それに今はブルーがわるかったもんねー」

「うぬうぬ」

ナルニーナがジェリーの体を触るように叩く。その手がジェリーの黄土色の体に触れる度、毛がぼふぼふ音を立てた。ように感じたいや、そんな音はしなかったけど、なんとなく音が出てるような感じがしたの。

「そんでさ。オレたち今から昼なんだけど、ご一緒してもよろしくって？」

ナルニーナの座っている周辺には人はいない。別に避けられてる様子はない。食堂を見渡せば、他にもちらほらそういうところがあるしね。

「あ、はいよろこんで」

許可を得ました。ということでルーにはナルニーナの所で待つてもらって、昼食を取りに行く。

ブルーはさつき、「ご一緒してもよろしくて？」みたいなこと言っただけど、これはもちろんふざけて言った言い回しである。それに対してナルニーナの「よろこんで」は素、だと思う。

モニーも素でそうやって返すような子だね。ナルニーナも結構育ちはいいのかな？ まあ貴族なんてほとんどそんなものか。

いやいや、貴族を軽蔑してるつもりはないよ、なんかそういう言葉になっちゃったよ。なんで自分に言い訳してるんだろ？

後ろを振り向いてナルニーナを探す。さっきまでいた場所を見るだけでいい。

ナルニーナが、机に突っ伏していた。え、大丈夫かな？ さっき育ちはいいいって思ってただけになんか行動が意外だよ。

人差し指でブルーをつんつんと突つつく。

「うん？」

「あれ」

「あー、ナルニーナ？ さっきオレ達が席を離れた瞬間に、腰が抜けたーじゃなくて緊張が解けたように突っ伏してた。髪の毛ちょこっとトマトにグチャってた」

見てたんだ……。あたしの記憶する限り、今日の料理が書かれた板とにらめっこをしてた気がするんだけどね。

「あ、そうそう、さっき疑問に思っただけだよー。……聞いているー？」

「うん、聞いてるよ」

「よし、ではお話しませう。さっきていうか、ジェリー見てて思っただけだね。いつか読んだ絵本があるんだけど」

「絵本って子供だね」

「うるさいやい。ちーつと静かにしとれい。で、その絵に出てくる鼠って、めっちゃ前歯が長かったんだよ。その鼠の顔の半分ぐらいはあつたなー」

「……それで？」

「それで、なんです。その話は、いつも怠けてばかりのネズミさんが、自分の前歯で木とか色々かじってみんなの家を建ててあげましたって話なんだけど。どっかで読んだ本に、あ、確かの話だよ？ 覚え間違いかもしれないんだけど、鼠のあの前歯って一生伸び続けるんだって」

「え、そうなんだ」

「そうそう。んで、硬いものかじって前歯擦り減らすんだって」

「痛そうだね……」

「だよな！　じゃねえよ話ズレた。で、前歯放置してそのまま伸ばすと、口塞いじやって食べ物取れなくなって死んじやうんやて」

「へえー……。豆知識だね」

「うん、フラット博士による豆知識です。んだからさ、その絵本のネズミは家を建てる前に餓死したんじゃないかという」

「あー……。まあ絵本だし？」

「絵本だしね。さて、選びましょか」

自称フラット博士による豆知識が話されて終わってみれば、丁度順番が回ってきた。さて、何食べよっかなー。

## 29・前歯のあるネズミは（後書き）

補足です。休日の昼食は食堂です。

### 30・他四ヶ国語の言語は

男子寮はロビーが使えなくなったが、そのほかは変わらず。ロビーの丁度上の階の部屋を使ってる人は他の部屋を使ったりしたもの、それ以外はいつも通りであった。

先生に二度目の事情を聞かれ、その後はいつも通り過ごす。

月曜日の朝、ドアを開ければ無言で壁によりかかっているチェリアがいた。

「……おはよう」

「おはよ」

空気に耐えかねて挨拶をすれば、ご機嫌斜めと言う風にチェリアが返事をする。まあ、仕方ないが、もうすこし凹んでいそうだというのに。

チェリアに抱き締められた小竜は苦しいのか、もがいて抜け出そうと頑張っている。そして諦めた。

「昨日、あの後どこ行っただ？」

少し尋ねにくい質問であったが、やはり気になるものは気になるし

「……友達の部屋」

「へえ」

何したんだ、と訊くのは無粋だろう。にしても、友達の部屋か。

ロジスがない状態、それを踏まえて行く友達の部屋。……かなりの親密度がないとダメだよな。

流石に、俺もチェリアの友好関係をすべて把握してるわけじゃないからな。

「……大丈夫か」

尋ねた後に自分で後悔した。大丈夫なわけがないじゃないか。俺はバカか。ダメ人間だ。

「どうかな」

チェリアはフツと笑った。儂い表情。……美少年だと、絵になる

な。

「おつはよー諸君！ う？ あれれれれのれれれるえ？ あ、ちよつとクドすぎたねサーセン。ところで、シフターはどこだい？」  
食堂に着けば、待ち構えていたのはいつもの三人。そしてフラットから尋ねられた、この質問。……ああもう、事情を知らないのは嫌でも承知だが、だあああ！

「ああ、ロジーなら風邪だよ」

「あら、大丈夫ですか？」

「あとでお見舞い行こうか？」

「フラットさんもモニキヤムの意見に賛成であります！」

最初はどもったものの、それほど違和感なく答えたチェリアにほつとしつつ。お見舞いに来ると言う三人をどうかわすか。

「るろ、ろロジスが風邪うつしたくないってな」

ああああオレが噛みまくってどうする！ フォローするつもりが余計怪しくなってしまった。俺はバカか。チェリアの視線が少し厳しい。

「おいおい相棒、噛みすぎじゃないかい？ ふーん？ チェリアはその部屋で大丈夫なん？ 風邪うつらんの？ てか、治療系使い魔なのに風邪ひいてどうするんだよ」

ロジスがいらないのいいことにからかうフラット。……いや、こいつは本人がその場にいても言いそうな気がする、って俺は何故自分の使い魔にひどいイメージを！

「ぼくは大丈夫。心配してくれてありがとう」

「ふむ。ま、チェリアがそういうならえっか」

話は一段落ついたようだ。……ふう、無駄に疲れた。流石に顔には出さないが、心臓がバクバクだ。嘘をつくという行為は、緊張を促す行為である。これは、昔の近衛騎士が言っていた言葉だ。言葉

が残されているのに、名前は残されていない、というのを不思議に思って、それのお陰でとてもよく頭に残っている。

「んで、突然お話は変わりますが」

「なーに？」

「こう、言語について考えてみました」

「ああ、そういえば今年の外国語の授業はシア語ですわね。それが？」

「いえいえ違いますのよ。そうではなくてですわね。あ、これはあくまでフラットさんの考えなんですがね。本を読んだときに思ったんですよ。あ、えと、いや、あ、あ、もう！ うああ話がまとまらなくてすいません……」

「いいのいいの。ほら、続き続き」

「うい。で、本の中で、他の言語のない世界の話なんですがね。そこに神様から使者が現れるんですの。それで、色々あって、話は通じてるけど実は違う言語をしゃべってたんだ！ って話になるんだけどさ。なんか、おかしくね？ だって、『他の言語がない』んなら、そもそも『言語』って言葉が生まれなきゃ？ そこをね、疑問ったんです」

……随分と哲学的な話をするな。こいつはホント、訳がわからな。い。バカなのか、頭がいいのか。いや、二つに分類するんじゃないで、他のものに分類してみようか。

「そうだねー……じゃ、それから考えると、あり得ないってされてるほとんどのものは実在されることになるよ？」

「いや、まあそういう視点もありかなって。モニーとか、チェリアはどう思う？ あ、あと相棒も」

……後からつけたされたように言われた言葉。少し心臓にグサツとくるものがあった。

「ところで、それはなんの話ですか？」

「あ？ えと、確か『リンデ・タウ』って感じの題名だった」

「何それ。ばくもそれ読んでみよっかなー」

「おい、順番来たぞ」

前の人が配膳を終わらせたのに、話に夢中になって気付かない四人をたしなめれば、いそいそと皿を取って料理を取り始めた。ったく……。

「ちっちゃい頃ってさ、スイカの種食ったあとお腹に生えるかとビクビクしなかった？」

「あ、したー！」

「私もしたわ。侍女に笑われて恥ずかしかったのよ」

フルーツとしてスイカがあったがために、スイカのことについて話始めれば、もうそれはそれは盛り上がった。いや、いつも通りなんだがな。

事の発端、というまでもじやないが、フラットが白い種を取らずにそのまま食べていたことからである。それに気付いたチエリアが指摘したことから始まった。

「アンダーリスは？」

「ん？ ああ、オレはすでに胃の中で消化されるのを学んでいたからな」

会話が止まった。

……これだけは言わせてくれ。心の中だし。空気を読まなかったわけではないのだ。

「いやはや、流石ですなー……。えいさい、きょーいく」

「すごいね……」

「同じ貴族として、ちょっと私ダメね。うふふっ」

「キリーがすごすぎるだけだよ」

十人十色の反応をされる。

英才教育については、まあ。

元々、アンダーリス家はそこまで教育はしないのだ。幼いころ

ならば、王族の子供の遊び相手が仕事である。だが、俺の代は。俺の代は、先代のことで周りが、色々、だったから。せめては、勉強、と。

別に無理やりやらされていたわけでもない。勉強は、やればやれほど身のためになるし。

「ねね、貴族の教育って他になにやるん？ よーわからん！」

「俺の家は少し他と違うからわからないが……他四ヶ国語は習った」

「あら、すごいわ！ 私は帝王学を少々。弟が生まれるまで」

帝王学か……。俺は勉強しなかった。騎士ならば、必要ないからな。ただ、一応、保険のために今度勉強しようかと思うが。

「そっかー。弟君元気？」

「ええ、元気よ」

そうして、チェリアの、今にも泣きそうな顔に気付かず、時は過ぎて行くのだった。

### 31・闇夜の少女の心は

「明日さ、ノビ行くやん？ めっさ楽しみなんだけどシフター行けそ？」

そうフラットが言ったのは、みんなが朝食を食べ終え、授業までの残りの時間をお喋りで潰していたときのことである。

「あ、多分無理、かな」

ノビというのは、正式名称ノビレッティ合衆国であり、同時にこのツァー王国の従属国の一つの名前である。去年一年間ノビ語を習い、明日明後日にノビに行き、異文化を研究すると言う建前の旅行である。

「そういえば……ここだけの話ですが、ノビレッティは十二年前に宰相が国を治めてからは荒れてるらしいです。私達が行くのは治安の良い……とは言いづらいかもしれませんが、魔法学院と王宮の城下町だそうですよ」

それなら俺も聞いたことがある。ノビレッティはツァーと違い、きちんと王族が生きてるのが確認されている。宰相が殺そうと躍起になっているので逃げ回っている、と。

「え、ホント？ ひどい話だね。でもさ、もったいないよね。あたし達みたいなのは行く機会ないと思うし。あ、でも、外交の仕事についたら行けるのかな？」

「貴族とかつてさー、外国とか行くの？ パーティに招かれたりとかそんな感じの」

キヤムの発言には理解に時間がかかった。フラットの発言でより理解した。

そうか。……庶民だと、外国に行く機会はないよな。商人でもないかぎり。

しかも、今ロジスは誘拐されているから旅行なんて無理だ。……よくよく考えて、俺は何をしてるんだろつか。友達が誘拐されてい

る。学校でのんびり過ごしている。……でも、俺に出来ることはない。魔法だってやり始めたばかりだ。そんな俺に、何かできるとは思えない。それが言い訳であり、世の中の厳しさであることは百も承知だが。

「私はありますわ。といつても、言葉が喋れなくて粗相をしては困りますから、まだノビレッティしか行ったことありませんけど。この前初めて行きましたの」

「相棒、うわー、あーなんでもない」

氣を使われたな。今。わかりやすいほどに。

宗主国の王族の、命を守れなかった貴族には、外国からパーティのお誘いなど来ない。

「そろそろ時間だね。行こつ」

氣まずい雰囲気の中で助け船を出したのはキヤムだ。なるほど。確かにそろそろ行かないとな。

その日の夜。城下町の噴水の近くの路地で、それは行われていた。「まさかあなたが生徒に偽装してるなんてね。顔は隠したようだけど、よく学院を騙せてるわね」

娘の声。先日とは違い、打って変わって違う印象をする服を着ている。

ゆつたりとしたワンピースに、麦わら帽子。

「なんじゃ。何か不満かの？」

性別不明の老人は相変わらずの格好である。

「色々理由付けてたけど、それでわかったのね」

「ふん。大体わしは生徒に偽装などしておらん」

「じゃあ何？ あなたが生徒だっていうの？」

「それは違うのう。ま、駄弁はこれぐらいにするかの。アヤツ、学校から抜け出したようじゃ。お主ら、誘拐はしておらんのじゃろう

？」

驚愕の色に変わる娘。戸惑いを隠せない娘は口を開いて止まる。

「……どうということ？　ちょっと待って。こっちも聞きたいことがあるの。学院で、わたしをレポートさせたのはあなた？　仲間は学院の外で待ってたの」

「その件か。いや、あれはわしではない。大人の事情じゃ」

「おと、って……。学校から抜け出したって、どうということよ」

待ってましたと言わんばかりに楽しげな雰囲気醸し出した老人。本当におとぎ話の悪い魔女のようだ。

「あつひやつひやつひやつひやつひやつひゃ」

「何よ」

「どうやら、なるつもりらしいぞ？」

「なるって？」

話が理解できない、というように、苛立ちを言葉に含ませる娘。

老人が変に溜めるのだ。うざいうざい。悪い魔女め、と性別のわからない老人に心の中で毒を吐く。

「王様に、な」

「……………え？」

信じられない。どうということ。何があったの。沢山の思いが交錯する娘は困惑していた。

どうということだ。え？　え？　頭の中は疑問符で埋め尽くされている。どうという心境の変化？　いやこいつの言っていることは嘘かも知れないよ？　そんな簡単に信じるの？　あれ？　でも本当だったら？　どうし、て？　わたしの言ったこと……………で？

「生まれた時からアヤツを匿っておったやつが仰山おってな。お前らが動いたことで腹を決めたらしい」

……嘘、だ。いや、あり得ることはわかってるの。別に信じたくないわけでもない。でも頭の理解が追いつかなくって。

でも、でも、そういうことなら。

「わたし、たち。解放、されるの？」

あの、宰相によって支配された私達の、国。ツアーの王族がいなくなつて、反旗を翻し、王は殺され、王子はひっそり生きながら、それから、宰相が好きかってして。

そんな、治安も悪くなつた私達の国。変わる、の？ 元に、戻れるの？

「それはどうかのう？」

「……どうしてよ」

だって、私達だって協力するもの。宰相から甘い蜜を啜ってるやつ以外なら、虐げられてる私達のような人なら、絶対。

「もしアヤツの根が宰相のように腐つておつたらどうするのじゃ？」

……確かにその可能性もあるわ。でもね？

「匿われたのよね。なら、キチンとそういう思想とか、暗示みたいな感じの洗脳受けてるんじゃないの？」

宰相を悪とし、権限を取り戻すために。

「そうじゃな。じゃ、わしはこれで。少々私用で急いでおつたんじや」

「そう。……また、とは言わないわ。多分あなたとはこれで最後ね」

「じゃな。では、さらばじゃ！」

老体には似つかわしくない、軽やかな足取りで路地の奥へと消えていく。

それを見ながら娘は安堵した。

「これからは、きつと楽になるよ。だから待つてね」

心の中を言葉にすると、なんだか軽くなつたような気がした。でも肩はまだ重い。ある程度軽くなつたけど。

まずは仲間にこれを報告しなくては。

そして、戻つて、戦うんだ。戦わないかもれないけれど。

娘は、空を見上げて睨んだ。

### 32・衝突する町娘の彼氏は

朝。ノビへ行く前に生徒の数を確認するため、学院内の丘では点呼が行われていた。

チエーカス先生率いる子のクラスはフラット、ロジス以外全員集合中である。

フラットは用事で他の先生に呼ばれているらしい、と朝食時にキヤムから聞いた。

「じゃあ今から説明するぞー」

そう言って先生が語り出したのはノビへの行き方。どうやら無属性の先生方が一人ずつテレポートさせるらしい。

俺達に以前バンダナについて語ったことについては、向こうに着いたらまた魔法をかけるから、向こうにいる先生に言うこと。

ノビではクラス単位で移動すること。そして、ノビ語を使って話しかけてみることに。

使い魔が見知らぬ地で興奮するかもしれないのできちんと管理すること。

「（おい、お前今どこだ？ 早くしないとテレポート間に合わないぞ）」

先生が近くににいる人から順に魔法をかけ始めたので、便利なテレパシーを使ってフラットに話しかける。大体朝から——キヤムが言うにはキヤムが起きる前から——呼びだされるとはなんなのだろうか？

「（お、おおう？ あ、あああ、の、ですね、すすすそ、そその、実はフラットさん、すでにノビ側にいるんですよ）」

……何故か返答から、その場で一人でに慌てているフラットが見えた気がした。

しかし、すでにノビにいるとはどういうことだろうか？ 質問をすれば、気まずそうではあるがすぐに答えが返ってきた。

「（あのですねー？ 先生から呼び出されたの知ってる？）」

「（キヤムから聞いたが）」

「（そそ。それでさっきいた場所から丘までちょっと遠いかなさ。丁度ノビまでテレポして頂きました。って感じ。ってことで待つてまーす。あでゆでゆ）」

へえそうか、と納得したところで、再びフラットからテレパシーが入る。なんだ？

「（あ、先生は知ってるよー。事前に連絡行ってたっばすから。んじゃ）」

忙しい奴だ。

まあいい。お、そろそろ自分の順番だ。

先生に近寄れば、十数秒後には違う場所にいた。すごい……。これがテレポートというやつか。

周りの生徒もテレポートを体験したおかげか、観光も始まっている。ないのにわいわいと騒ぎ始めている。

とりあえずそこらへんにいる先生に呼びかけて、バンダナへ魔法をかけてもらった。

「ちーっすアンダーリス君」

声に反応して振り向けば、頬に指がぐさり。

……やられた。

いえーい、と言いながら喜んでるフラット。……後でやり返すか。

「モニー、ノビ語自信ありんす？」

「ありませんわ。ここは、やっぱり」

三人と二匹の視線が一齐にこちらに向けられた。……はあ。しかも何故使い魔達まで。

「なんで俺が」

「ええだつてえ。あいばあ。小っちゃいときからあ。四ヶ国語あーうおイタっ」

イラつく喋り方をしていたフラットは叩かれた。いや、俺じゃな

くてキヤムとモニーに。二人の息がぴったり合っていたすごい。……まあ確かに。小っちゃいときからというよりは、家の中で五ヶ国語をこちゃ混ぜにしていたわけだが。

「何するし！」

「イラついたからー」「イラつきましたのでー」

語尾を伸ばしてハモるように言う二人。この三人は仲が良いよな……。基本的にフラットがいじられてるようだが。一年の時から仲がいいのだろうか？ 今度理由でも訊くか？ ……そういえば、モニーはフラットの事をブルーと呼んでるな？

「ってことで、相棒、任せたぜ！」

「ん？ あ、ああ」

……あ。無意識に承諾してしまった。

こうして俺は『地域の人に質問しよう』という役目を請け負ってしまったわけだが……。それを決めていたのには理由があった。

クラス単位で行動するのにもかかわらず、三人以上のグループを作れと言われた。理由は、お互いを監視して迷子にならないようにするらしい。

いつもなら、子供か、と言いたくるところだが、浮かれているクラスメイトを見てしまっただけは何も言えまい。誰かが迷いそうだと

つるむ時はロジスとつるみ、基本は一人行動の俺は、自動的に相棒と組むことになったのである。

相棒はクラスを中心であるにしろ、どちらかといえば笑いの中心であり、クラスのボス、というわけではない。むしろ本人がクラスのボスとなるのを好しとしていないようだ。

どのグループにも溶け込めるが、基本はモニーとキヤムとつるんでいるような感じ。

その三人グループに男が一人。……食事のときはチェリアかロジスと一緒に微妙な気分である。

グループを組ませたあと、先生がこう言ったのだ。

「そのグループの中で誰か一人、あとで泊まる宿の方に質問をするように」  
と。

そして話はさきほどへと戻るのである。

レポートされた広場——先生の説明によると、ノビの学院の城下町の真ん中——からぞろぞろと列を成して歩いているわけだが。  
……店には活気があふれているのに、農民には元気がない。

何かの用で街に出てきた人たちなのだろうが……ツアーの農民よりは明らかに痩せているし、服もみすばらしい。

騒いでいる生徒たちを見て外国人だとわかったのか、羨むような苛立ちのような視線を向けてくる。それゆえに、楽しそうにしていた生徒たちからも段々重苦しい雰囲気が漂い始めていた。

「……農民、虐げられてるっぽくね？」

普段より小さめに話しかけられた声に三人で頷く。

「噂は本当でしたのね……」

「なんか今すぐ帰りたい、あつ、ごめんなさい！」

フラットの肩が通行人の肩に当たる。っておいおいお前普通にツアー語喋ってるぞ。

「いえいえ、こちらも前を見てなかったの。ごめんなさい」

通行人——町娘の格好をしている——の口から帰って来たのは綺麗なツアー語だった。

謝罪の言葉を述べると、すぐに忙しそうに早歩きで去っていく。

「綺麗な子だったね……。ツアー語喋ってたし」

「だねー」

「彼氏いるのかな？」

拳を顎にあて、真剣に彼氏がいるのかどうかを考えているフラットに歩きつつも、先程の町娘について考える。暇だからな。

ツアーの町娘が何故ここに？ 商人ならまだしも。だとしたらツアー語が喋れるノビの町娘か。と納得する。

これにて町娘についての考察終了。……つまらない暇つぶしでし

た。

フラットはまだ真剣に考えている。これ使い魔なんだよなあ……  
としみじみしつつ、無意識にこれ、と考えていた自分に苦笑する。

「……ま、いつか」

難しい顔を緩ませ、キヤムの背中へと突進するフラットを見つつ、  
店から聞こえる声に集中する。……ふむ。どうやら普通に理解でき  
るようだ。問題ない。

そこで突然、キヤムが立ち止まった。

「……え？」

目の前を向いて驚愕した表情をするキヤムを見て正面を見渡すが、  
特に何もない。

「どうしたの？」

三人の心情を代表するようにフラットが質問すれば、キヤムが怯  
えるように言った。

「やばい、か、も」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2598r/>

---

青いメガネのその少女

2011年7月4日03時33分発行